

W・S・モーム 作 宮川誠 訳

『手紙』 三幕

登場人物

レズリー・クロスビー

ロバート(ボブ)・クロスビー

ハワード・ジョイス

ドロシー・ジョイス

ジョン・ウィザーズ

パーカー夫人

ジェフリー(ジェフ)・ハモンド

オン・チーセン

チュン・シー

シーク教徒の巡査部長、中国人の女、中国人のボーイ数名、マレー人のボーイ数名

物語はマレー半島の農園とシンガポールで起こる。

第一幕

場面 クロスビー所有のバンガローの居間。舞台後方はベランダで占められていて、庭から数段の階段で上がれるようになっていいる。居間は、質素だが、家具が心地よく配置されている。クッションが載った数脚の藤の椅子、花の生けられた花瓶、マレーの銀器が載った幾つかのテーブル。壁には何かかの水彩画、マレーの短刀・短剣、牛の角、虎の頭部の剥製。床に藤の莫蔭。コテツジピアノの譜面台には開かれた楽譜。灯りはテーブルの横に立つ一つのランプ。その小さなテーブルの上に、レースを編むための台が置かれている。ランプがもう一つ、ベランダの中央から垂れ下がっている。

幕が上がると、銃声が聞こえ、ハモンドの叫び声。彼はベランダに向かってよろめきながら歩く。レズリーがもう一発銃を撃つ。

ハモンド うー、よせ！

彼はベランダに蹲る。レズリーは彼の後を追いながら、もう一発撃つ。そして、倒れたハモンドの真上から、続けざまに、機械的に、引き金を引き続ける。六発の弾倉が空になって、

カチカチという音。彼女は拳銃に目を遣り、それを手から落とすと、ハモンドの死体を見つめる。その目は顔から飛び出さんばかりに大きく見開かれ、恐怖の表情が浮かんでいる。彼女は身震いし、死体を見つめたまま後退りして部屋に戻る。庭から興奮したざわめきが聞こえ、それを耳にしたレズリーはハッとすする。すぐに**ボーイ長**が現れ、またすぐにもう一人の**ボーイ**。そして二人が話している間に、もう二、三人が現れる。**ボーイ**は二人とも中国人で、アンダーシャツに白いズボン。他はマレー人で、腰巻姿。ボーイ長は小柄で太っていて四十歳くらい。

ボーイ長 奥さん！ 奥さん！ どうした？ 鉄砲の音聞こえた。（死体を見つけて）ああ。

もう一人の**ボーイ**が興奮した様子で中国語で彼に話し始める。

レズリー 死んだ？

ボーイ長 奥さん！（彼は膝を折って死体を見る。）これ、ミスター・ハモンド。誰、殺した？

レズリー 死んだ？

ボーイ長は跪き、ハモンドの顔に手を近づける。他の者は周りを取り囲み、お互い同士何か話している。

ボーイ長 はい。死んだ思う。

レズリー ああ、神様！

ボーイ長 （立ち上がりながら）奥さん、なぜこのことした？

レズリー あなた、副長官がどこに住んでるか知って？

ボーイ長 ミスター・ウィザーズのこと？ はい、知ってる。ここからずっと遠いところに住んでる。

レズリー 連れてきて。

ボーイ長 奥さん、日の出まで待つ、それ、もつといい。

レズリー 怖がらないで。ハッサンが車を運転してくれるから。ハッサンはそこにいるの？

ボーイ長 はい、奥さん。（彼はマレー人の一人を指差す。）

レズリー ウィザーズさんを起こして、すぐにここに来てほしいと伝えて。事故があつて、ハモンド

さんが亡くなったと言うの。いい？

ボーイ長 はい、奥さん。

レズリー さあ、早く。

ボーイ長は、運転手**ハッサン**の方を向き、車を用意するようにマレー語で指示する。**ハッサン**はベランダの階段を下りる。

ボーイ長 奥さん、死体、なか入れる、からの部屋のベッド置く、もったいい思う。

レズリー (打ち拉ひがれたような苦悩の叫びと共に) だめ。

ボーイ長 ここ残しておく、できない、奥さん。

レズリー 触らないで。ウィザーズさんが来たら、どうするべきか言ってくれるでしょう。

ボーイ長 オーライ、奥さん。アー・シン、ここ待たせる、どう？

レズリー あなたが好いと思うなら……。それと、旦那さんを呼んでほしいんだけど。

ボーイ長 郵便局みんな閉まった、明日朝あしたまで電話できない。

レズリー いま何時？

ボーイ長 多分、十二時。

レズリー 村を通る時、郵便局の人を起こして、何とかしてシンガポールに連絡を取ってもらって。

それとも警察署で。警察なら連絡できるかもしれない。

ボーイ長 オーライ、奥さん。やってみる。

レズリー どんなことをしてもすぐ旦那さんに連絡して。必要ならちよつとチップをやって。

ボーイ長 もし旦那さん話せたら、なに言う？

レズリー メモを書くわ。

ボーイ長 オーライ、奥さん。書いて。

彼女はテーブルに向かって座り、紙を一枚取りだし、書こうとする。

レズリー ああ、手が！ 鉛筆を持ってられない。(彼女は自分自身への怒りから拳でテーブルを

叩き、もう一度鉛筆を取る。そして伝言を書いて、それを手に持って立ち上がる。) さあ、これ。

これは電話番号。旦那さんは今ジョイスさんの家よ。

ボーイ長 知ってる。弁護士さんね。

レズリー いい、返事があるまで電話を切らせちゃ駄目よ。もし英語が苦手なら、マレー語でもいい

から。さあ、読んでみて。

ボーイ長 はい、奥さん。(読む)「すぐに来て。恐ろしい事故があった。ハモンドが死んだ。」

レズリー いい？ 理解できる？

ボーイ長 はい、理解できる。

車のエンジン音がする。

レズリー 車よ。じゃ、急いで。

ボーイ長 はい、奥さん。

彼はベランダを通過して出てゆく。

レズリーは床を見つめたまま暫く立っている。マレー人の女が二人、階段をそつと上つてくる。二人は死体を見て、興奮した様子で何か囁き合う。レズリーは皆がまだそこにいるのを意識する。

レズリー　そこで何してるの。出てって。さあ、みんな、出てって。

中国人のボーイ、アー・シンだけを残して全員が静かに黙って出てゆく。レズリーはボーイを暫く見ているが、やがて横の部屋に入ってゆく。そこは彼女の寝室である。ドアに鍵がかけられる音がする。アー・シンが居間に入り、テーブルの上の箱から煙草を一本取って火をつける。彼は肘掛け椅子に腰掛け、脚を組んで、煙を吐き出す。

一旦幕が下りる。

三時間の経過を示すために、一分間の間がある。場面は以前と同じ。幕が上がると、ジョン・ウィザーズが部屋を行ったり来たりしている。死体は片付けられている。ボーイ長が入ってくる。

ボーイ長　車来る音、聞こえた。

ウィザーズはベランダへ行き、耳を傾ける。

ウィザーズ　何も聞こえないぞ。(苛々して)何をこんなに手間取ってるんだ。(クラクションの音が微かに聞こえる。)そうだ、車だ。やれやれ、やつと来てくれた。

ジョン・ウィザーズは若く、ござっぱりした白い麻のスーツを着ている。彼の日除帽がテーブルの上にある。彼はレズリーの部屋のドアの所へ行き、ノックする。

ウィザーズ　クロスビー夫人。(返答はない。彼はもう一度ノックする。)クロスビー夫人、レズリー　なにか？

ウィザーズ　車が近付いてきます。旦那さんですよ。(やはり返事はない。彼はちよつと耳を傾け、我慢ならないといったジェスチャーをして、ベランダへと移動する。車が到着する音。エンジン音が止む。)クロスビーさん？

クロスビー　そうだ。

ウィザーズ　やれやれ。来ないのかと思いましたよ。

クロスビーがベランダの階段を上がってくる。四十歳、頑健な体躯で、日焼けした大きな顔。

今は鍔広の帽子、カーキ色のコートを身に付けている。

クロスビー レズリーはどこだ。

ウィザーズ あの部屋です。鍵をかけて閉じこもってしまっただ。あなたが来るまでは誰にも会いたくないと。

クロスビー 何があったんだ。(彼はレズリーの部屋のドアの所へ行き、荒々しくノックする。)

レズリー！ レズリー！

暫しの間、ジョイスが階段を上がってくる。四十五歳くらい。痩せて骨張った男で、髭はきれいに剃ってある。日除帽を被り、麻のスーツ姿。ウィザーズに手を差し出し握手する。

ジョイス わたしはジョイス。副長官？

ウィザーズ ええ。ウィザーズといいます。

ジョイス クロスビーは今夜わたしの家にいたんだ。だから一緒に来た方が良かろうと思ってね。

クロスビー レズリー。俺だ。開けてくれ。

ウィザーズ (ジョイスに) ああ、弁護士さんですね。

ジョイス そうだ。ジョイス・アンド・シン普森法律事務所のね。

ウィザーズ 知ってます。

ドアが解錠され、ゆっくりと開いて、レズリーが出てくる。彼女は後ろ手にドアを閉めると、それを背にして立つ。

クロスビー (彼女を自分の腕の中に受け入れようと手を差し伸べて) レズリー。

レズリー (彼を避けるように) ああ、触らないで、お願い。

クロスビー どうしたんだ。何があったんだ。

レズリー 電話で聞かなかったの？

クロスビー ハモンドが殺されたと。

レズリー (ベランダの方を眺めながら) 遺体はまだそこに？

ウィザーズ いえ。運ばせました。

レズリーは寝られた顔付きで三人の男を見ると、頭を後ろに反らす。

レズリー レイプされそうになったの。だから彼を撃った。

クロスビー レズリー。

ウィザーズ なんてことを。

レズリー ああ、ロバート、来てくれて嬉しい。

クロスビー レズリー、レズリー。

レズリーは彼の腕の中に身を投げる。ロバートは彼女をしっかりと抱きしめる。ついに彼女は泣き崩れる。

レズリー しっかりと抱いて。離さないで。わたし怖い。ああ、ロバート、ロバート。
クロスビー 大丈夫だ。何も怖がることはない。しっかりとしろ。

レズリー あなたがいてくれるんですものね？ ああ、ロバート、どうしたらいいの。わたしとても惨めな気持。

クロスビー 大丈夫だ、しっかりとしろ。

レズリー もっと強く抱いて。

ウイザーズ 何が起こったのか、ちゃんと言えますか。

レズリー いま？

クロスビー さあ、ここに座って、レズリー、おまえは疲れてるんだ。(彼はレズリーを椅子に導く。

レズリーは疲れ切った様子で椅子に沈み込む。)

ウイザーズ 酷なことは承知しててなんですが、仕事として……

レズリー ええ、もちろん分かっています。できる限りお話しますわ。落ち着くように努力します。

(クロズビーに)ハンカチを貸して。(彼女はクロスビーのポケットからハンカチを取り出して、

瞼を拭う。)

クロスビー 急ぐことはない。ゆっくりな。ゆっくり話せばいい。

レズリー (無理にも唇に笑みを浮かべて)戻って来てくれて嬉しい。

クロスビー 有難いことにワードと一緒に来てくれた。

レズリー ああ、ジョイスさん、本当にご親切に。(彼女は手を差し出す。)こんなお時間にわざわざ

さお出でくださるなんて。

ジョイス なに、構いません。

レズリー ドロシーは？

ジョイス 相変わらず元気いっぱいですよ。

レズリー わたし、なんだか気が遠くなりそう。

クロスビー ウイスキーでも飲むか？

レズリー (目を閉じて)ウイスキーならテーブルの上。

クロスビーはテーブルに行き、ウイスキーとソーダを混ぜる。レズリーは目を閉じて長椅子に横になる。顔は青ざめている。

ジョイス (小声でウイザーズに)いつ来たんだね？

ウイザーズ ええと、一時間か、もうちょっと前です。ぐっすり寝てたんですが、ボーイに起こされ

た。クロスビーさんの家の者が外に来ていて、すぐ会いたがっているとされたんです。
ジョイス　で？

ウィザーズ　勿論飛び起きました。ボーイがベランダにいて、ハモンドが撃たれたから至急来てほしいと。
ジョイス　撃つたのは夫人だと言ったのか？

ウィザーズ　ええ。ただ、ここに着いた時には、夫人は鍵をかけて部屋に籠もってしまっていて、且

　　那さんが来るまでは部屋から出ないよ。

ジョイス　ハモンドは既に死んでいたんだな？

ウィザーズ　ええ、躰中、穴だらけでした。

ジョイス　（微かに驚いた調子で）えっ！

ウィザーズ　（銃をポケットから取り出して）これです。六つの弾倉は全て空です。

　　レズリーがゆっくりと目を開け、二人の男が話しているのを見る。ジョイスは銃を手に取り、それを見る。

ジョイス　（ウイスキーを持って部屋を横切ってくるクロスビーに）ボブ、これはきみのか？

クロスビー　そうだ。（彼はレズリーのもとへ行き、彼女がウイスキーを啜っている間、躰を支える。）

ジョイス　ボーイたちに尋問は？

ウィザーズ　しました。でも何も知りませんでした。向こうの棟で寝ていたら、銃声で起こされた。

　　で、ここに来たらハモンドが床に横たわっていた、と。

ジョイス　正確にはどこに？

ウィザーズ　（指差して）あそこです。ベランダの、ランプの真下。

レズリー　ありがとう。すぐ良くなるわ。面倒をかけてごめんなさい。

ジョイス　もう話せますか。

レズリー　ええ、多分。

クロスビー　そんな急ぐ必要はないだろう。女房はまだ話せる状態じゃないんだ。

ジョイス　遅かれ早かれ、やらなくちゃならないんだから。

レズリー　大丈夫よ、ロバート、ほんとうに。もうすっかり良くなった。

ジョイス　できるだけ速やかに事実関係を知っておくべきなんだ。

ウィザーズ　でも、ゆっくりでいいですよ、クロスビー夫人。何だ彼だ言っ、ここにいるのは皆んな友達なんですから。

レズリー　何を話したらいいの？　何か質問してくださいれば、できるだけお答えするようにします。

ジョイス　全てを話してくれた方がいいと思うんだが、あなたのやり方で。どう？　できますか？

レズリー　多分。（彼女は長椅子から身を起こそうとする。）

クロスビー　どうしたいんだ？

レズリー 座りたいの。(彼女は腰掛け、そして暫し躊躇する。クロズビーとワイザーズは立ったまま。ジョイスは彼女の向かいに腰掛ける。全員の視線が彼女に注がれる中、レズリーはワイザーズに向かつて話す。)今夜夫がシンガポールに出掛けていたことはご存知ですよね？

ワイザーズ ええ、ボーイから聞きました。

レズリー わたしも一緒に行くつもりだったんですけど、気分が勝れなくって、ここに留まることにしたんです。わたし、一人でいることは全然気になりません。(クロズビーに笑顔にならない笑顔に向けて)農園主の妻なら慣れっこですもの、ねえ、あなた？

クロズビー そうだな。

レズリー 夕食をいただいたのはかなり遅い時間でした。その後レースを編み始めたんです。(彼女はレース台を指差す。レース台には半分ほど完成したレースが何本かのピンで留められている。)

クロズビー レースにかけちゃ、女房は名人クラスなんだ。

ワイザーズ ええ、噂に聞いたことがあります。

レズリー どのくらいやっていたかよく憶えていません。編み始めると夢中になってしまつて、時間の感覚がなくなってしまうんです。と、突然、外に足音がした。それから、誰かがベランダの階段を上がってきて、「こんばんは。入ってもいいですか」と言っています。驚きました。だって車の音がしなかったから。

ワイザーズ ここに来る時、運転手が気付いたんですが、ハモンドの車はここから五百ヤードほどの

道端、木の下に停めてありました。

ジョイス 何故そんなところに停めたのかな？

ワイザーズ 車の音を聞かれたくなかつたんでしょう。

ジョイス 奥さん、続けてください。

レズリー 最初、誰か分かりませんでした。レースを編むとき眼鏡をかけますし、それにベランダは薄暗くて、誰が誰か見分けがつきませんから。それで「どなた？」って訊くと、「ジェフ・ハモンドです」と答がありました。「あら、ハモンドさん、どうぞ入って。一杯いかが？」と、わたしは眼鏡を外して、立ち上がった。そして握手をしました。

ジョイス ハモンドだと判って驚きましたか。

レズリー ええ、とても。長いことこの家に来ていなかったから。そうよね、ロバート？

クロズビー 少なくとも三ヶ月はな。

レズリー 夫は留守だとわたしは言いました。仕事でシンガポールに行っていると。

ワイザーズ で、ハモンドは何て？

レズリー 「それは残念。今夜はなんだか寂しくて、ちょっとここにお邪魔して、皆さんがどんな様子か知りたくまりましたね」と。わたしはどうやって来たのかと尋ねました、車の音を聞いた覚えがありませんでしたから。彼は、わたしたちはもう寝ているかもしれない、もしそうなら起こしたくなかつた、それで車は道端に置いてきた、と言いました。

ジョイス なるほど。

レズリー　ロバートが出掛けていましたから、部屋にウイスキーはなかった。でも夜更けにボーイを起すのも何ですから、わたしが取ってきました。ハモンドは自分でハイボールを作って、パイプに火をつけました。

ジョイス　彼は素面しよふでしたか？

レズリー　さあ、飲んでいたかもしれませんが、その時は何も考えませんでした。

ジョイス　で、何があったんです？

レズリー　特に何も。わたしはもう一度眼鏡をかけて、編み物を続けました。わたしたち、あれこれお喋りをしました。ハモンドは、二、三日前に道で虎が目撃された、山羊を何匹か殺したそうで、いま村人が騒いでいる、自分は週末にそれを捕まえるつもりだが、ロバートは聞いているだろうか、と、そんなことを。

クロスビー　ああ、虎のことなら知ってる。昨日昼飯のとき話しただろう、憶えてないのか？

レズリー　そう？　そうだったわね。

ウィザーズ　で、奥さん、それから？

レズリー　わたしたち、ただお喋りしていたんです。すると突然ハモンドが馬鹿なことを言った。

ジョイス　何て？

レズリー　大したことじゃありません。ただのお世辞です。

ジョイス　彼が言ったことを正確に話してください、その方がいい。

レズリー　ハモンドはこう言いました。「どうしてきみはそんなひどい眼鏡をかけてるのか。好い

容色きりようが台無しだ。きみの目はとても素敵だ、隠しておくのは勿体ない、実際。分かるだろ？」と。ジョイス　彼が以前その種のことを言ったことは？

レズリー　ありません、一度も。わたしちよつと驚きました。でも軽く受け流すのが一番だと思ったので、「わたしは自分が取り立てて容色きりよう好しだなんて己惚うぬぼれていません、分かるでしょ？」と応じました。すると「でもきみは無茶苦茶綺麗だ」と言うんです。……でも、ジョイスさん、こんなこと繰り返してもしょうがないでしょう。馬鹿げてますわ。

ジョイス　どうか気にしないで、彼の言ったことを正確に教えてください。

レズリー　ハモンドは「きみがわざと不細工に見えるようにしてるのは勿体ない。でも、有難いことに、成功はしてないがね」と。(彼女は微かに批難するような表情を浮かべる。)わたしは肩をすくめました。そんなことを言うのはちよつと無礼だと思っただけです。

クロスビー　当り前だ。

ジョイス　で、あなたは応えたんですか？

レズリー　ええ。「もしはつきり知りたいなら言いますが、あなたがわたしのことをどうお考えかなんてこれっぽっちも気にしていません」と。わたし、肘鉄砲を喰わせたつもりだったんですけど、彼は笑っただけで、「それでも僕は言いたい。きみは僕がこれまで会った中で一番可愛い女性だ」と言った。わたしは「お世辞がお上手なこと。でもそう思うなんて、知恵が足りないとしたか言いようがありません」と応えました。するとまた笑いだした。彼はそれまであそこに座っていたんですが、立ち上がって、わたしが編み物をしていたテーブルの近くの椅子を引き寄せて、

「きみの指は世界で一番美しい。まさか、それを否定する気はないだろう」と言った。わたしは腹が立ちました。実際わたし、指には自信がないんです。だからそれについては言っただけでいい。自分で嫌だなど思っていることまで褒めてもらいたがる女は、馬鹿としか言いようがありません。そうじゃなくって？

クロスビー レズリー、おまえ……。(彼は彼女の片手を取って、それにキスをする。)

レズリー ロバート、あなた、莫迦な人。

ジョイス で、ハモンドはその調子で話している間、腕を組んでじっと座っていたんですか。

レズリー いいえ。手を取ろうとしました。でもわたしは彼の手をピシヤリと叩いてやった。特に困惑したわけじゃないんです。ただ馬鹿なことをやっているな、と。わたしは、「ふざけないで。

さあ、あの椅子に戻って。分別を持って話しましょう。さもないと帰ってもらいますよ」と。

ウィザーズ しかし、奥さん、何故その場で追い出さなかったんです？

レズリー 騒ぎになってほしくなかったの。ねえ、男性の中には、チャンスがあるのに女性にちよっかいを出さないでいるのは相手に対して失礼だ、きつと相手もそれを期待している、って考えてる人がいるのよ。もしかしたらそう期待している女性も多いのかもしれないけれど、でもわたしは違う。ねえ、あなた、そうでしょ？

クロスビー 全く違うね。

レズリー 男性が戯れに口説いてきたからといって、一々騒ぎ立てていたら、馬鹿みたいでしょう。

どんなに初心な女だって、女なら、そんなことに全く意味はないってことは知っています。わたし

レズリー しはハモンドが真剣だとは思いませんでした。

ジョイス へんだな、と思いはじめたのはいつ？

レズリー すぐその後。次に言ったことを聞いた時です。彼は席を動かこうとしなかった。わたしの顔をじっと見て、こう言ったんです。「僕がきみに首つ丈だって判らないの？」

クロスビー あの野郎。

レズリー 「判りません」とわたしは応えた。そんなこと、わたしにとって何の意味もありません。しよ、だから、冷静さを保っているのは少しも難しくありませんでした。「まったく信じられませんが」とわたしは言った。「それに、たとえそれが真実であったとしても、言っただけでほしくありません」と。

ジョイス ハモンドの言葉に、驚いたことは驚いたんですね？

レズリー ええ、もちろん。だって、わたしたち知り合って七年も経つんですよ。ねえ、あなた？

クロスビー そうだ。あいつがここに来たのは戦争の後だった。

レズリー それに、これまでわたしに注目したことなんて一度もなかった。わたしの目が何色かだっただけで知らないでしょう。彼にとっちはわたしなんて存在さえしていなかったと言っただけでいいんです。

クロスビー (ジョイスに) 思い出してほしいが、俺たちはあいつとほとんど会ってなかったんだ。

レズリー 最初にここへ来た時、あの人は病気でした。わたしはロバートに頼んで、連れてきてもらった。バンガローで全く独りぼっちでしたから。

ジョイス バンガローはどこに？

クロスビー ここから六、七マイルのとこだ。

レズリー そんなところで、面倒を見てくれる人もいなくて寝ているかと思うと、耐えられませんでした。だからここに運んでもらって、元気になるまでお世話した。その後あとも何度か会う機会はありましたが、わたしたちほとんど共通点がないでしょ、だからあまり親しくはならなかった。

クロスビー ここ二年はほとんど会ってないな。ほんとを言うよ、病気の時あんなにレズリーが面倒見てやったのに、ちっと感謝の念が足りないんじゃないかと思ってた。

レズリー 昔は時偶ときたまテニスをしにここへ来ましたし、他の人ほかの家でも時々出会いました。でも、ここ一月は姿を見ていないと思います。

ジョイス なるほど。

レズリー 彼はハイボールをもう一杯作りました。ここに来る前からずっと飲み続けていたんじゃないか、いくらなんでも飲み過ぎじゃないかと思っただから、「わたしなら、もう止めておきますね」と忠告した。穏やかに、です。怖いとか、そういうった感情は少しもありませんでした。わたしの考えている方向にもっていけると思っただけです。でも彼はわたしの言ったことにまるで注意を払いませんでした。グラスを空にすると、それをテーブルに置いて、「酔ってるからこんなことを言ってると思うのかい？」と、変な声で言うんです。わたしは「それしか説明のしようがないでしょう？」と応えました。……ああ、本当に、こんなこと、お話しなきゃいけないんですか？ こんな、みつともない、恥ずかしいお話を。

ジョイス 話したくないことは判りますが、しかしあなた自身のためです。どうか全てを話してください。
さい。

ウィザーズ もし奥さんが時間がほしいとおっしゃるなら、待っても一向構いませんが。

レズリー ありがとう。でもどうせ話さなくてはならないのなら、今お話します。待ってもしようがないでしょう。ただちよつと頭痛がするんです。

クロスビー ハワード、あんまり厳しくしないでやってくれ。

レズリー ジョイスさんは、これ以上ないほど優しくしてくれていますわ。

ジョイス そのつもりです。で、「それしか説明のしようがない」とあなたは言った。それから？

レズリー 彼は「そんなことはない」と言いました。「知り合った時からずっと好きだった。ずっと口に出さないようにしてきた。でももう駄目だ。ああ、好きだ、好きだ」と、そんなことを。

クロスビー (歯軋りするように、小声で) 豚野郎。

レズリー (椅子から立ち上がって) わたしはレースを机に置いて立ち上がりました。「おやすみなさい。」手を差し出してわたしは言った。でも彼は手を取らなかつた。立ち上がってわたしを見ているんです。おかしな目付きだった。「僕はまだ帰らない」と彼が言った。わたしは堪忍袋の緒が切れかかっていた。我慢しすぎていると思えます。わたし、気性は穏やかな方だと思えますが、でも一旦怒ったら、何を言い出すか判らない。「かわいそうに、あなた本当に馬鹿ね。」わたしは声を高めた。「分からないの？ わたしはロバート以外の人を愛したことはないの。それ

にたとえ仮にロバートを愛していないとしても、あなたみたいな人を好きになるなんて絶対ない。」すると彼が「それがどうしたって言うんだ。ロバートは留守なんだ」と。

クロスビー あの野郎。なんて野郎なんだ。

ジョイス 静かに、ボブ。

レズリー もう限界でした。わたしは我を忘れた。でも怖くはなかった。頭に浮かばなかったんです、彼があんな……あんな……。ああ、汚らわしい。わたしはただ怒りに震えていた、——ロバートはいない、邪魔者はいない、それを知っていてあんな風に言い寄るなんて。「今すぐ出て行かなければ、ボーイを呼んで摘まみ出させますよ」と言いましたが、彼は嫌らしい目でわたしを見ると、「どうせ声は届かないさ」と笑った。わたしはベランダに出ようとしました。あそこからなら声が届きますから。彼の横を通り過ぎようとすると腕を掴まれた。「放しなさい。」わたしは怒って叫びました。「いやだね、放さない。さあ、捉まえたぞ。」彼が言った。わたしは大声で「ボーイ！ ボーイ！」と叫びました。でも、手で口を塞がれてしまつて……。ああ、ぞつとする。これ以上は話せません。あまりにも酷い。悍ましい。もう堪えられません。

クロスビー ああ、レズリー、おまえ。おまえをここに置いていったのが間違えだったんだ。

レズリー 怖かった。本当に怖かった。(彼女は悲嘆に暮れて啜り泣く。)

ジョイス さあさあ、冷静になって。今までのところあなたは素晴しかった。きついことは解ります、全部話してほしい。

レズリー はい。……何をされているのか、最初は解りませんでした。彼はわたしを抱くと、キスし始めた。口はお酒臭くて火照つていた。わたしは顔をそむけようと藻掻きました。「やめて！ やめて！」わたしは叫んだ。「お願い、放して！」わたしは泣き始めていた。逃げようとした。でも彼は、まるで気が狂っているようでした。

クロスビー 俺はもう我慢できない。

ジョイス ボブ、黙って。

レズリー 一体何が起こっていたのかよく解りません。混乱していたし、とても怖かった。彼は何か喋り続けているようでした。愛しているとか、きみが欲しいといったようなことを。ああ、あの惨めさ！ きつく抱かれていて、動くに動けませんでした。彼にあんな力があつたなんて。猫に捕まった鼠のようでした。どうしようもなかった。怖ろしかった。わたし、全てをお話しようと努めているんですが、何もかもがぼんやりして……。そのうち、だんだん力が抜けていった。気絶するんじゃないかと思いました。暑苦しい、お酒臭い息が顔にかかって、気分が悪くなりました。

ウィザード 人非人め。

レズリー 彼はキスしてきた。首に、項に。ああ、あの怖ろしさ！ きつく抱かれて、息ができないほどでした。それから持ち上げられた。彼を蹴ろうとしましたが、なお強く締めつけられただけでした。わたしを運ぼうとしているんだと感じました。彼は何も言わなかった。わたしは彼を見たくありませんでしたが、ふと顔が見えた。真つ青だった。目は血走っていた。あれはもう人間の顔じゃなかった。野蠻人だった。わたしの心臓は激しく鼓っていた。……そんな風にわたしを

見ないで、そんな目で見られたくない。……突然、寝室に連れて行かれるんだ、という考えが過りました。ああ！

クロスビー あの野郎、もし死んでなけりや、俺がこの手で絞め殺してやったところだ。
レズリー すると、彼が躓いて転んだ。あつという間のことです、どうしてなのかは分かりません。何か足を引っかけたのか、それとも単なる偶然だったのか。わたしも一緒に転びました。その時がチャンスだった。締め付けが緩んだんです。わたしは本能的に彼から逃げた。ほんの一瞬の出来事で、自分が何をしているのか判りませんでした。わたしは飛び上がると、ソファの後ろに身を引いた。彼は立ち上がるのにちよつと時間が掛かった。

ウィザード ハモンドは足が不自由でしたね。

クロスビー そう。戦争で膝小僧をやられたんだ。

レズリー でもまたすぐにわたしに飛びかかろうとした。テーブルの上にピストルがあった。わたしはそれを掴んだ。銃を撃つことはまったく憶えていません。銃声が聞こえ、彼がぐらぐらとるのが見えた。彼は叫んだ。何か言ったのですが、何だったか分かりません。わたしは我を忘れていた。彼はよろめいて部屋を出るとベランダへ向かった。わたしは彼を追った。あとのことは何も憶えていません。銃声が次々と聞こえた。信じてくださいとは申しませんが、わたしは自分が引き金を引いていることさえ分からなかったんです。ハモンドが倒れるのが見えた。突然奇妙なカチカチという音が聞こえた。弾がなくなつた、ピストルが空になつたんだということが心を通つた。その時初めて、自分が何をしてしまつたのか分かつたんです。目から鱗が落ちるようでした。

た、文字通り……。と、突然ハモンドの姿が見えた。蹲るようにそこに横たわっていました。

クロスビー (彼女を腕に抱いて) 可哀相に。

レズリー ああ、ロバート、わたし何てことをしてしまつたの？

クロスビー おまえは女なら誰でもしたことをしたまです。ただ、十人中九人はその勇気を持っていないがな。

ジョイス たまたま銃が机の上にあつたと言いましたが、それはどうして？

クロスビー レズリーを独りで残しておかせることは滅多にあることじゃないが、そうしなきゃならん時には武器を手元に置いておかせろ。その方が安全だろう。シンガポールへ出掛ける前、俺は弾を全部込めておいた。やれやれ、やつておいて良かったよ。

レズリー これで全てです、ウィザードさん。お出でになつた時、すぐにお目にかからなくてごめんなさい。わたし、どうしても夫に側にいてほしかつたんです。

ウィザード 分かります。当然のことです。あなたは立派に振舞つた。全部を話してくださいなんて、大変な苦しみを与えてしまつて、本当に申し訳ない気持です。でも、ジョイスさんも正しかつたと思えますよ。なるだけ早く全ての事実を知つておいた方が好いことは確かですから。

レズリー ええ、分かります。

ウィザード あの男が酔つ払つていたことは明らかです。彼は当然の報いを受けたにすぎませんよ。

レズリー でも、もし生き返らせることができるなら、わたし、何をあげたつていい。わたしが殺したんだつて考えると、ああ……。

クロスビー　なに、あいつにとっちゃ、楽な死に方さ。俺だったら、あん畜生を拷問にかけて……

レズリー　やめて、ロバート、やめて。あの人はもう死んでるんだから。

ジョイス　ちよっと遺体を見せてもらえますか？

ウイザーズ　どうぞ。案内します。

レズリー　（少し身を震わせて）わたしは行かなくていいでしょう？

ジョイス　ええ、勿論。ボブとここにいてください。ほんのちよっと見せてもらうだけです。

ジョイスとウイザーズは出てゆく。

レズリー　疲れた。とっても疲れた。

クロスビー　分かるよ。おまえのためなら何でもするつもりだが、今は何もできそうにないな。

レズリー　わたしを愛してくれることはできるわ。

クロスビー　これまでもずっとおまえを愛してきた、心から。

レズリー　分かっている。でも今だからこそ。

クロスビー　もしこれ以上愛せるんなら、勿論そうするさ。

レズリー　あなた、わたしを責めてはいないわよね？

クロスビー　責める？　おまえは立派だった。神にかけて、勇気ある女だ。

レズリー　（優しく）これから色々心配をかけることになるわ。

クロスビー　俺のことは考えるな。俺は問題じゃない。自分のことだけ考えろ。

レズリー　わたし、どうなるのかしら。

クロスビー　どうなる？　おまえを罰しようなんて言う奴がこの植民地にいたら、見てみたいもんだ。

おまえを知ってる連中は皆んなおまえを誇りにするさ。

レズリー　あれこれ言われたくない。それはいや。

クロスビー　誰も何も言わんさ。

レズリー　皆んながどんな酷いこと言っても、あなたは信じないわよね？

クロスビー　勿論。第一、連中に何が言える。

レズリー　分からない。でも人間って、薄情なものよ。わたしの方から誘わなかったら言い寄ったり

しなかったはずだ、——そう言う人は必ずいる。

クロスビー　誰もそんなこと夢にも思わんさ、おまえを知ってる連中なら。

レズリー　あなた、わたしを愛していただけるわよね？

クロスビー　勿論だ。言葉にやらんほどだ。

レズリー　わたしたち、これまでずっと、幸せだった、そうでしょ？

クロスビー　勿論だ。結婚して十年だが、俺にはたった一日しか経ってないみたいに見える。なあ、

俺たち、口喧嘩したことさえない、そうだろ？

レズリー　（微笑んで）あなたみたいに親切で優しい人と誰が喧嘩できるって言うの？

クロスビー　なあ、レズリー、俺は馬鹿っ話ばなしができる男じゃない。だから、こんなことを言うのはみ

つともなくてしようがないんだが、これだけは知っておいてもらいたいんだ、——おまえが俺のためにしてくれたことに、どんなに感謝してるか。

レズリー あなた、そんなこと……。

クロスビー なあ、俺は頭が悪いし、図体ばかりでかくて無様な男だ。おまえの靴を磨く資格さえない。そんな俺を何故おまえが気にかけてくれたのか、最初分からなかった。おまえは最高の女房だよ。

レズリー あら、ナンセンス！

クロスビー ナンセンスじゃない。なあ、俺があまり喋らんからといって、何も考えてないとは思わんでくれ。何故こんな幸運が転がり込んできたのか、俺には分からんのだ。

レズリー あなたたったら！ そう言ってもらってとっても嬉しいわ。(クロスビーは彼女を腕に抱き寄せ、躊躇いがちに唇にキスをする。ジョイスとウイザーズが戻ってくる。極り悪がることなしにレズリーは夫から身を離し、二人の男の方を向く。) 何か召し上がりますか？ すっかりお腹がすいたでしょう。

ウイザーズ 奥さん、気にしないでください。

レズリー ちっとも構いませんわ。ボーイはまだその辺にいるはずですから。もしいなかったら、わたしが何か簡単なものをお作りします。

ジョイス わたしも何も要りません。

レズリー ロバート、あなたは？

クロスビー 要らない。

ジョイス そろそろシンガポールに出発した方が良いと思うんですが。

レズリー (ちよつと驚いて) いま？

ジョイス 着く頃には夜が明けている。風呂に入って朝食を摂れば八時でしょう。司法長官に電話して、何時に会ってもらえるか決めなくては。どうかね、ウイザーズ君、それが最善だと思うが。

ウイザーズ ええ、そうですね。

ジョイス きみも一緒に来るんだよね？——勿論。

ウイザーズ その方が良いと思います。

レズリー わたし、逮捕されるの？

ジョイス (ウイザーズをちよつと見て) もう既に逮捕されている、と思うが、違うかね？

ウイザーズ でも、奥さん、これは単に形式にすぎませんから。ジョイスさんのおっしゃりたいのは、あなたご自身が司法長官の所へ行って、自首した方が好いと……。勿論、これはわたしの専門外のことでして、自分が今何をすべきなのか、よく分からないんです。

レズリー かわいそうなウイザーズさん。御迷惑をかけて申し訳ありません。

ウイザーズ わたしのは気にはしないでください。最悪、とんでもないことをしてくれたもんだと、

お目玉を喰らうくらいのもんでしょから。

レズリー (微かに微笑んで) それに今夜はぐっすりお休みになれなかったし。

ジョイス さて、準備ができれば、出発したいのですが。

レズリー わたし、牢屋に入れられるの？

ジョイス それは司法長官が決めることです。あなたの話を聞いて、保釈してもらえるかもしれない。要は罪名が何か、それ次第です。

クロスビー 長官は善い奴だ。できるだけのことをしてくれるさ。

ジョイス しかし司法長官としての義務は果たさなくてはならない。

クロスビー そりゃ、どういうことだ？

ジョイス 罪名は一つしか有り得ない、と言うことも考えられないことじゃない。その場合、保釈請求はしても無駄だろう。

レズリー 何？——罪名は。

ジョイス 殺人です。

一瞬の間がある。この言葉にレズリーが驚いたことを示すのは、片方の拳を固く握りしめたことだけだが、声を平静に保っておくためにかなり努力していることは判る。

レズリー では、ちよつと部屋に行つて、ジャンパーに着替えてきます。それに帽子も。すぐ戻ります。

ジョイス じゃ、ボブ、一緒に行つてやれ。手伝うことがあるだろう。

レズリー あら、その必要はありませんわ。一人でできます。ジャンパーに着替えるだけですから。

ジョイス そうですか。しかし、ボブ、一緒に行つてやれ。その方がいい。

レズリー わたし、自殺なんて考えていませんから、ご安心を。

ジョイス 自殺？ そんなことは思いもしませんでした。が、まあ、そう願います。なに、ちよつとウィザーズ君と二人で話したいと思ひましてね。

レズリー それなら。ロバート、一緒に来て。

二人は寝室に入る。ドアは開けたままである。ジョイスはドアのところに行きそれを閉める。

ウィザーズ なんとまあ、大した女性ですね。

ジョイス (明るく) どうしてそう思う？

ウィザーズ あんなに平静でいられるなんて。これまであんな女性を見たことない。鉄の神経を持つてるに違いない。

ジョイス 思っていたより遥かに強い性格を持っている。

ウィザーズ 夫人とは長い付き合いなんですよね？

ジョイス クロスビーと結婚してからずっとだ。彼とは植民地で一番古い友人だが、ただ、夫人のこととはあまり良く知らないんだ。シンガポールへはほとんど来ないからね。わたしは、夫人はとも控えめな人だと思つていた、それにとてもシャイだと。しかし女房はしよつちゆうここへ来ていて、夫人のこととなると夢中になつて話したが。女房が言うには、一旦知合いになれば、必

ず素晴らしい女性だと判るってね。

ウィザーズ 勿論、素晴らしい女性ですよ。

ジョイス (微かにだが、皮肉っぽく) 確かに。とても可愛い人だ。

ウィザーズ いやア、感動しました、あんな怖ろしい話をあんな風に話せるなんて。

ジョイス もうちよつと明晰であつても良かったんじゃないかな、特に最後の方だが。ところどころかなり混乱していた。

ウィザーズ ねえ、ジョイスさん、あれ以上何を期待するんです？ あなたにだって分かったでしょ、

夫人は最後までやり通した。驚きですよ、あんなに理路整然と話せるなんて。それにしても、ハモンドは非道い奴ですね。

ジョイス ところで、きみはハモンドを知っていたんだよね？

ウィザーズ ええ、少しだけですが。わたしはここに赴任してまだ三ヶ月ですから。

ジョイス 副長官として、ここが最初の赴任地かね。

ウィザーズ ええ。

ジョイス ハモンドは飲んだくれだったかね。

ウィザーズ そんなことはなかったと思います。飲むことは飲みましたが、酔いつぶれたのは見たことない。

ジョイス 勿論わたしも彼の噂は聞いたことがある、実際に会ったことはないが。かなり御婦人方にもてたということだが、そうかね？

ウィザーズ なんだって男前でしたからね。それに、お分かりでしょ？——元気がよくなって、向う見

ずで、金離れがよかつたし。

ジョイス そう。女はそういう男に惚れる。

ウィザーズ この植民地でも一番の人気者だったと思いますよ。戦争で足を怪我する前は、テニスのチャンピオンだったし、ペナンとシンガポールの間では最高にダンスが上手いという評判でした

からね。

ジョイス きみはあの男が好きだった？

ウィザーズ ああいう男を好きにならない人間はいないでしょう。敵は一人もいなかった。

ジョイス あんなことをすると予想できたかね？

ウィザーズ どうしてそんなことがわたしに？ 人間、酔っぱらったら何をするか、誰にも分かりま

せんからね。

ジョイス わたしの見解では、酔っ払った時ごろつきなら、素面の時もごろつきだ。

ウィザーズ で、これからどうなさるおつもりで？

ジョイス ハモンドについていろいろと調べてみなくちゃならんことは確かだろうな。

レズリーが入ってくる。続いてクロスビー。彼女は手に帽子を持っている。

レズリー 早かつたでしょ？

ジョイス 我が女房にも見習ってほしいものです。

レズリー あら、多分あなたの身支度の方が奥様の倍は時間が掛かるんじゃないかって？ ロバートは

いつもわたしの四倍は掛かるんですよ。

クロスビー ちょっと先に行って、車をすぐ動かせるようにしておく。

ウィザーズ わたしも乗れますか？ それとも、わたしは別の車で行きませうか？

レズリー 充分乗れますわ。

クロスビーとウィザーズは出てゆく。レズリーが後に続こうとする。

ジョイス 一つお訊きしたいことがあるのですが。

レズリー 何でしょうか？

ジョイス 今、ハモンドの死体を見て来たのですが、どう見ても、銃弾の何発かは床に倒れた後に発射されている。真上から撃ち込まれたという印象です。

レズリー (疲れたように手を額において) あのことば、ちよつとの間だけでも忘れたかったのに。

ジョイス どうしてあんなことをしたんです？

レズリー 何故なのか自分でも分かりません。

ジョイス しかし必ず訊かれますよ。

レズリー あなたはわたしが冷酷な女だとお考えのようですね、実際より。あの時わたしは冷静さを

失っていた。あるところから後のことは、何もかもが混乱していて、ぼんやりとしか憶えていないんです。ごめんなさい。

ジョイス なら、気にしないで。恐らくそれが普通なんでしょう。煩わづらわせて申し訳ありませんでした。

レズリー では、出掛けませうか。

ジョイス ええ、そうしましょう。

二人は出てゆく。ボーイ長が入ってきてベランダに通じるブラインドを下ろす。彼は灯あかりを消して、滑るように出てゆく。部屋は暗闇に覆われる。

〔幕〕

場面はシンガポールの拘置所の面会室。がらんとした部屋で壁は漆喰が剥き出し。その壁の一つにマレー半島の大きな地図が掛かり、もう一つの壁に額に入ったジョージ五世の写真。窓には鉄格子。家具は磨かれた松材のテーブルと六脚の椅子のみ。上手と下手とにそれぞれドア。窓を通して鬱蒼とした熱帯植物と真つ青な空が見える。

幕が上がると、ロバート・クロスビーが窓のところに立っている。かなり意気消沈した様子。服装は、半ズボンにカーキのシャツという、普段農園を見て歩く時のもの。手にはよれよれの古い帽子。彼は深く溜息をつく。上手ドアが開いて、ジョイスが入ってくる。続いて、書類鞆を手にしたオン・チーセン。オン・チーセンは広東人で、小柄だが均整のとれた体付き。白麻のスーツ、エナメル皮の靴、明るい色の絹のソックス、金の腕時計、目立たない鼻眼鏡、胸ポケットから金張りの万年筆。完璧な装いである。

クロスビー ハワード。

ジョイス きみがここに居ると……。

クロスビー レズリーに会いに来たんだ。

ジョイス わたしもだ。

クロスビー 俺は居ない方がいいか？

ジョイス そんなことはない。呼ばれたら奥さんに会ってやれ。わたしはその後ここで会える。

クロスビー なぜ俺はここで会えないんだ。独房で、しかもあのクソ女看守に見張られて会わなくちやならんのは酷すぎる。

ジョイス 今朝事務所に顔を出してくれるものと思っていたが。

クロスビー 仕事を抜けられなかったんだ。何だ彼だ言っても、農園の仕事は続けなくちやならんかな。もし俺が面倒見なかったら、滅茶苦茶になっちまう。仕事を片づけてすぐここへ来た。クソ忌々しい農園だ。

ジョイス しかし実際のところ、この一月ばかり、やらなくちやならないことがあつたつてのは、悪いことじゃなかったと思うがね。

クロスビー まあ、そうかもしれんが、時々気が狂うんじゃないかと思つたよ。

ジョイス ボブ、気をしっかり持つてくれよ。きみがおかしくなっちゃ困る。

クロスビー なに、大丈夫だ。

ジョイス 何だか一週間ぐらい風呂に入っていないみたいだな。

クロスビー 風呂なら入ってるさ。服が汚いのは分かつてるが、農園を歩くにはこれが好いんだ。着替える気にならなくてな、そのまま来た。

ジョイス 面白いな、——奥さんよりきみの方が今回のことを深刻に考えている。奥さんは冷静沈着そのものだ、眉ひとつ動かさない。

クロスビー レズリーは俺の十倍は価値がある。本当だ。こう言ったからって別に恥ずかしいとは思わん。えーい、クソ、どうしたらいいか分からん。あれがいなくて、俺は迷える子羊だよ。結婚してから二日と離れて暮らしたことはない。ほんとに孤独だよ。(彼はオン・チーセンに目をやる。) 誰だ、あいつは。

ジョイス オン・チーセンといってね、信頼できる秘書だ。

オン・チーセンは白い歯を輝かせ、笑みを浮かべて軽く会釈する。

クロスビー 何故ここに居るんだ。

ジョイス わたしが連れてきた。必要になるかもしれないから。オン・チーセンは良い弁護士だよ、わたしと同じくらいには。香港大学出身で、いま弁護士家業の裏表を勉強中さ。それが済んだらすぐ開業するつもりでいる、わたしの事務所の向かいだね。

オン・チーセン こんにちは。

ジョイス オン君、ちよつと外に出ていてくれ。必要になったら呼ぶ。

オン・チーセン 承知しました。近くに居ます。

ジョイス そうしてくれ。

オン・チーセンは出てゆく。

クロスビー ハワード、俺がこの一月半どんなに苦しんだか。この苦しみは、親の代からの敵にだって経験してほしくないね。

ジョイス ボブ、最近ちゃんと寝てるか？

クロスビー ここ三日、目を閉じた記憶がない。

ジョイス 有難いことに、それも明日には終わるさ。で、その公判のために、ちよつとは身繕いしてくれるだろうね。

クロスビー ああ、勿論。今夜はお前さんのところに泊めてもらうつもりだ。

ジョイス そりゃ良かった。で、裁判の後、二人で我が家に来てくれるだろうか？ ドロシーがどうしてもお祝いをすると言ってきかないんだ。

クロスビー レズリーをこんな薄汚い留置場に入れるなんて、酷すぎる。

ジョイス そうする他ないんだよ。

クロスビー どうして保釈してやれないんだ。

ジョイス 残念ながら、容疑が容疑だからね。

クロスビー まさに官僚主義、形式主義だ。真面目な女なら誰でもしたことをしただけなんだぞ。レズリーは最高に優しい女だ。虫一匹殺せない。えーい、ちくしょう。結婚して十年にもなるんだ。

俺があれのことが分からないって言うのか、えっ！俺があの男を捕まえてたら、何も躊躇ためらわずに首根っこをへし折ってやったさ。お前だつてそうだろう？

ジョイス まあまあ、ボブ、皆んなきみの味方なんだから。

クロスビー 有難いことに、ハモンドを良く言う奴は誰もいない。

ジョイス 陪審員は全員、席に着く前に無罪と決めているさ。

クロスビー なら全部茶番だ。第一、逮捕されるべきじゃなかったんだ。それに残酷だろう、——あんな辛いことがあった後で、裁判なんて。可哀相に。俺がシンガポールで会った連中は皆んな、あれのやったことは正当防衛だと言ってる。男も女も。

ジョイス しかし、法は法だ。奥さんはあの男を殺したことを認めている。辛いことだが、それは事実だ。きみと奥さんには心から同情するがね。

クロスビー 俺のことは問題じゃない。

ジョイス しかし人が一人殺されたのは事実だ。文明国に於いては裁判は避けられない。

クロスビー 人間のクズを抹殺するのは殺人か？ レズリーは狂犬病の犬を撃つただけだ。あいつは人間のクズだ。

ジョイス わたしはきみの法律アドバイザーだから、これは義務として言うっておかなければならないが、実は一つだけ心配なことがあるんだ、——もし奥さんが一発だけ撃っていたら全く問題なかっただろう、しかし、不幸なことに、奥さんは六発撃っている。

クロスビー レズリーの説明で充分じゃないか。あれ以上明快な説明はない。あの状況なら誰だつて

同じことをしたさ。

ジョイス 多分……、勿論、奥さんの説明は理に適っている。

クロスビー じゃ、何を心配してるんだ。

ジョイス 事実を目を瞑つぶつてもしょうがないだろう。他の人間の立場になって考えてみることは良いことだよ、どんな場合もね。もしわたしが検察官で起訴する立場なら、まず間違いなく、何故六発も撃ったのか、その点を尋問の中心に置く。

クロスビー どうして？

ジョイス 六発撃つたということは、パニックになったというよりも、怒りを表わしているのではないか、制御できない怒りをね。奥さんが言ったような状況下では、女性は酷く怯えるだろう、それは理解できる。しかし怒りで我を忘れるだろうか。わたしが検察側ならそう言うね。

クロスビー それは推測にすぎん。こじつけだ。

ジョイス かもしれん。が、聊いささかなりとも論ずるに足る点ではある。

クロスビー 一番大事なのはハモンドの性格、人間性だろう。で、俺たちはあいつについて十分な証拠を手に入れたじゃないか。

ジョイス それは、中国人の女と暮らしていたということだな？

クロスビー そうだ。それで充分じゃないか。

ジョイス まあな。確かに、あれはハモンドを知る者にはかなりショックだった。

クロスビー 実際その中国女はこの八ヶ月あいつのバンガローと一緒に暮らしてたんだ。

ジョイス それを知って皆んな不思議なぐらい腹を立てた。あれで世論は完全に我々の味方になった。
クロスビー 中国女と暮らしてゐるなんて判ってたら、あいつが家に来るのは絶対許さなかつたんだ。
ジョイス どうやってこんなに長い間隠しておけたのかな。

クロスビー その女も証言台に立つのか。

ジョイス わたしは呼ぶつもりはない。ハモンドがその女と暮らしていた証拠を提出すればそれで充分だろう。そうすれば、いま世論が世論だから、陪審員は受け入れるさ、ハモンドが札付きの男だつたとね。

シーク教徒の巡査部長登場。彼は長身で浅黒く、鬚を蓄え、青い制服姿。

巡査部長 (クロスビーに) 旦那さん、さあ来て。

クロスビー やつと、か。

ジョイス もう待たされることもなくなるさ、明日にも奥さんは自由になるんだから。どこかへ旅行にでも連れて行ってやれ。保釈されることはまず間違いないが、裁判つてのは気が重いものだからな。終わったら二人とも休息が必要だろう。

クロスビー 休息なら俺の方がずっと必要だろうな。レズリーは大した女だ。えつ、分かるか、面会の時、慰めるのは俺の方じゃない、あいつが俺を慰めるんだ。いや、まったく、大した女だよ。

ジョイス まったく。奥さんは素晴らしい自制心の持主だ。

クロスビー すぐに戻る。お前さんが忙しいのは分かつてるから。

ジョイス ありがとう。(クロスビーは巡査部長とドアに向かう。巡査部長がドアを開ける。) 巡査、わたしの秘書はいるかな？(この言葉が終わるか終わらないうちに、オン・チーセンが滑るように入ってくる。) 例の書類を見せてくれ。

オン・チーセン イエッサー。

彼は鞆から書類の束を取り出してジョイスに渡す。ジョイスはそれを持ってテーブルのところに腰掛ける。

ジョイス 他に用はない。必要ならまた呼ぶ。

オン・チーセン 二、三、私的な会話で先生を煩わせてもよろしいでしょうか。

オン・チーセンは英語を外国語として学び、丁寧で完璧な英語を話す。ただRの発音は苦手だ、いつもそれがLの発音になってしまう。したがって、注意深い話し方にも拘わらず、微かなぎこちなさがしばしば感じられる。

ジョイス (微かに笑みを浮かべて) かまわんよ。

オン・チーセン わたくしが先生にお話したいと願っていることは、デリケートで内密なことです。

ジョイス 五分後にはクロスビー夫人がここに来る。内密の話なら、もつと適当な機会を見つけた方が良くはないかね。

オン・チャーセン わたくしが先生とお話したいと願っていることは、クロスビー事件に関わっていないです。

ジョイス そう？

オン・チャーセン ええ、そうです。

ジョイス オン君、きみの知性には高い敬意を払っている。だから、わたしがクロスビー夫人の弁護人として耳に入れるべきでないことを聞かされることはあるまい、そう確信しているよ。

オン・チャーセン わたくしの思慮深さについては御安心なさってよいと思います。わたくしは香港大学の出身ですし、英作文では学長賞を頂戴しました。

ジョイス じゃ、早く言ってくれ。

オン・チャーセン ある状況がわたくしの知るところとなりました。それはこの裁判に異なった様相を与えると考えます。

ジョイス どんな状況だ。

オン・チャーセン 不幸な被害者に宛てた、被告からの手紙が存在していることが、わたくしの知るところとなりました。

ジョイス 別に驚くことじゃあるまい。七年もの付合いなんだ、夫人がハモンドに手紙を書いたことがあつたつて不思議じゃない。

オン・チャーセン そうです。夫人はハモンド氏と頻繁に連絡を取り合っていたでしょう、食事に誘うとか、テニスに誘うとか。このことを知らされた時、わたくしも最初はその種の手紙なのだろうと考えました。しかしこの手紙はハモンド氏がお亡くなりになった日に書かれていました。

少しの間がある。ジョイスは目に面白そうな笑みを浮かべて、オン・チャーセンを見つめている。

ジョイス 誰から聞いたんだね。

オン・チャーセン この状況を知らせてきたのは、名前は申しませんが、わたくしの或る友人です。

ジョイス オン・チャーセン、きみの思慮深さは称讃の域を超えているな。

オン・チャーセン クロスビー夫人はあの運命の夜まで五、六週間は故人と連絡を取っていないと述べています。先生も間違いなく憶えていらつしやるでしょう。

ジョイス 憶えているよ。

オン・チャーセン この手紙が示唆するのは、わたくしの見解では、夫人の陳述は全ての点で正確、というわけではないということです。

ジョイス (手紙を貰うかのように手を差し出して) きみはその手紙を持っているんだろう？

オン・チャーセン いいえ。

ジョイス そうか。しかし内容は知っているんだな？

オン・チャーセン 友人は親切にもわたくしにコピーをくれました。お読みになりますか。
ジョイス 読んでみたいね。

オン・チャーセン は内ポケットから財布を取り出す。それはシンガポール・ドルや、メモや、
煙草カードで膨らんでいる。

ジョイス おや、きみは煙草カードを集めていたんだ。

オン・チャーセン はい。自慢ではありませんが、わたくしは大抵のカードを持っています。二つとな
い包括的コレクションです。

乱雑な財布から彼は半截はんせつの紙を取りだし、ジョイスの前に置く。

ジョイス (手紙をゆっくりと読む。自分の目が信じられない様子。)「ロバートは今晩留守です。

どうしてもあなたに会わなければ。十一時に来て。わたしは必死です。もし来てくれなかったら、
後はどうなっても知りません。……車では近づかないで。レズリー」……一体これはどういうこ
とだ。

オン・チャーセン それは先生がお答えになるべきことです。

ジョイス どうしてこれを書いたのがクロスビー夫人だと言えるのかね。

オン・チャーセン わたくしはその友人に全幅の信頼を置いています。

ジョイス わたしはそこまでは信用しないね。

オン・チャーセン 事実かどうかは簡単に判ります。クロスビー夫人にお尋ねになれば、そのような手
紙を書いたかどうか、すぐに答えてくださるでしょう。

ジョイスは立ち上がり、一、二度部屋の中を行ったり来たりする。それから立ち止まり、オ
ン・チャーセンに顔を向ける。

ジョイス 夫人がこんな手紙を書いたことは有り得ん。

オン・チャーセン それが先生の御見解でしたら、この件は勿論これで終わりです。友人がこの手紙の
ことをわたくしに話してくれたのは、ただ、わたくしが先生の御厄介になっっているからです。彼
は、検察側に連絡する前に、もしかすると先生がこの手紙の存在を知っておきたいと思われるか
もしれない、——そう考えたのです。

ジョイス 誰がオリジナルを持っているんだ。

オン・チャーセン 先生も当然憶えていらつしやると思いますが、ハモンド氏が亡くなった後、氏が中
国人の女性と関係があったことが判明しました。今はその女性が持っています。

二人は暫し無言で互いの顔を見つめ合う。

ジョイス オン君、いろいろ有難う、感謝するよ。この件については考えておく。
オン・チャーセン 分かりました。友人にその旨むね伝えておきますか。
ジョイス 連絡は取っておいてくれた方が良さそうだ、一応な。
オン・チャーセン イエッサー。

彼は部屋を出る。ジョイスは額に皺を寄せて手紙をもう一度読み通す。靴音がして、レズリーがやって来るのが判る。彼は手紙のコピーを机上の書類の中に隠す。レズリーが女看守と入ってくる。看守は太った、中年の英国人女性で、白い服を着ている。レズリーはこざつぱりとした装いで、髪は普段どおりに整えられている。冷静で落着いた様子。

ジョイス おはようございます、クロスビー夫人。

レズリーは優雅に前に進み出ると、手を差し出す。まるで自宅の応接間で客を迎えているかのような態度。

レズリー おはようございます。こんなに早い時間にお出でくださるなんて。

ジョイス 今日は、ご機嫌きげんはいかがですか。

レズリー ありがとうございます、この上ない気分です。ここは、ゆっくり過ごすのには最適な場所ですわ。それにパーカーさんが母親のように面倒を見てくれますし。

ジョイス おはよう、パーカーさん。調子は？

パーカー夫人 ありがとうございます、とっても良いです。クロスビー夫人、これだけは言うておきたいんですが、あなたみたいに手の掛からない人はいません。あなたが居なくなってしまうのかと思うと残念です、ほんとに。

レズリー (上品な笑みを浮かべて) パーカーさん、あなたは本当に親切にしてください。

パーカー夫人 あたしは話し相手を務めてるだけです。慣れてないと、こういうとこに居るのは寂しいもんですから。そもそも、あなたをこんなとこに入れたのが大間違いなんです。

ジョイス さて、パーカーさん、ちょっと席を外していただけますかな。二人だけで話したいことがありますので。

パーカー夫人 承知しました。では。

彼女は出てゆく。

レズリー あの人と居ると時々気が狂いそうになる。ほんとにお喋り。不思議じゃありません？——自分一人で居ることに満足している人間だっているんだ、つてことが分からない人がどんなに多いか。

ジョイス ここに来て一人の時間は充分に持てたでしょう。
レズリー ええ、たくさん本が読めましたわ。それにレース編みもしています。
ジョイス 睡眠も充分にとっていらつしやるようだ。
レズリー ええ、ぐっすりよ。今日まであつという間でしたわ。
ジョイス そりゃ良かった。お見かけしたところ、一月前よりずっと健康そうに見える。
レズリー 沈んでいるのはロバートの方。可哀相に、まるで遭難した船のよう。でも有難いことに
明日で全てが終わります。あの人にはもう限界ですもの。
ジョイス ロバートはあなた以上にあなたの心配をしている。
レズリー 座りませんか？
ジョイス ええ。

二人は椅子に腰かける。ジョイスは机上の書類を前にする。

レズリー ねえ、わたし、明日を特に楽しみにしているわけではありませんのよ。
ジョイス 一つ感心するのは、あの件について話す時、あなたがいつも同じ言葉を使うこと、一言一言全く同じ表現をすることです。
レズリー (優しくからかうように) 法律の専門家にとって、それはどんな意味を持つのかしら？
ジョイス あなたが並外れた記憶力の持主か、それとも明白な事実をありのままに語っているか、：

…。

レズリー 残念ながら、わたし、記憶力は良くありませんの。
ジョイス あの悲惨な事件の前ですが、あなたは二月ばかりハモンドと何の接触もなかった、――それは確かですね？
レズリー (微かな笑みを浮かべて) ええ、何も。それは確かです。わたしたちが最後に会ったのは、マクファーレンさんのところのテニスパーティーでした。でもあの時もほんの二言三言お話しただけです。マクファーレンさんのお宅にはテニスコートが二つあるでしょ、で、わたしたち、たまたま同じ組にならなかったんです。
ジョイス 手紙の遣り取りもなかった？
レズリー ええ。
ジョイス 絶対確かですね？
レズリー ええ、絶対に。だって、お食事に誘うか、テニスに誘う以外、手紙を書く理由がありませんもの。で、ここ何ヶ月もそのどちらもしません。
ジョイス 一時期あなた方はハモンドとかなり親しい間柄だった。誘うのを止めたのは何故？
レズリー (ちよつと肩をすくめて) 何であれ、人って飽きるものでしょ？ わたしたち、あまり共通点がありませんでした。もちろん、病気になる時は、ロバートもわたしも出来るだけのことをしてあげました。でもここ一、二年はすっかり元気だったし。それに、あの人とても人気があったから、色んなところから引張り蟻で。だから、それに加えてわたしたちまで招待する必要

はないって……。

ジョイス それで全てでですね？——絶対に。

レズリーは躊躇い、そして考えるように下を向く。

レズリー 中国人の女については勿論知っていました。実際に見たこともあります。

ジョイス そのことについては今まで何も話しませんでしたね。

レズリー あまり楽しい話題じゃありませんでしょ。それに、いざれあなたがご自身で突き止めるだろうと。こんな状況ですもの、あの人のプライベートについてわたしが最初に言うのは、あまり好ましいことじゃないと。

ジョイス どんな女でした？

レズリーは僅かにビクツとする。表情が一瞬だが硬くなる。

レズリー ……ああ、悍ましい人。太ってて、紅や白粉を塗りたくって。金のネックレス、金のブレ

スレット、金のヘアピン。若くさえない。わたしよりも年上。

ジョイス で、あなたはその女のことを知って、ハモンドとの関係を一切止めた？

レズリー ええ。

ジョイス しかし、そのことは御主人には何も言わなかった。

レズリー ロバートに話したくなるようなことではないでしょう。

ジョイスは暫しレズリーを見つめる。レズリーは、中国人の女について話した時の硬い表情は今はずっと影を潜め、再び冷静で落ち着いた表情である。

ジョイス 言っておくべきだと思いますが、あなたがジェフ・ハモンドに宛てて書いた手紙が存在します。

レズリー これまでに何度かあれやこれやで招待状を送ったことがあります。それにシンガポールに出掛けると耳にした時には、お買物を頼んだこともあります。

ジョイス この手紙は、ロバートがシンガポールに出掛けていて留守だから、会いに来てほしいというものです。

レズリー (微笑んで) それは有り得ません。そんな手紙を書いたことはありません。

ジョイス お読みになりますか？

彼は書類の中から手紙を取りだし、それをレズリーに渡す。レズリーはそれをちらっと見ると、すぐにジョイスに返す。

レズリー わたしの字ではありません。
ジョイス ええ、あなたの筆跡ではない。これはオリジナルの正確な写しだということです。

レズリーは手紙を再び手に取ると、今度はしっかりと読む。読むにつれ、表情に恐ろしい変化が表れる。色白の肌がいつそう血の気を失い、突然肉が落ちたかのように、皮膚が引きつる。ジョイスを見つめる目は眼窩がんかから飛び出さんばかりで、見るも恐ろしい表情である。

レズリー (囁くように) これは何を意味するの？

ジョイス それはあなたから伺うことでしょう。

レズリー 書いてません。誓ってわたしは書いてません。

ジョイス 言うことに気をつけて。もしオリジナルがあなたの手になるものなら、いくら否定してもしょうがない。

レズリー 偽物にせものです。

ジョイス 偽物であることを証明するのは難しい。が、本物であることは容易に証明できます。

レズリーは震える。ハンカチを取り出して掌を拭い、もう一度手紙を眺める。

レズリー 日付がありません。何年も前に書いたものかもしれません、——今はよく思い出せません

が。……時間をいただければ、記憶をたどってみます。

ジョイス 日付がないことはわたしも気がつきました。しかし、この手紙が検察の手に渡れば、ボーイたちを尋問する。ボーイの誰かがあの事故の夜ハモンドの家に手紙を届けたかどうかは、すぐに判る。

レズリーは拳を固く握りしめ、椅子の上で体を揺する。今にも気絶しそうである。

レズリー 誓ってわたしは書いてません。

ジョイス なら、これ以上話し合う必要はありません。手紙の持主が検察に提出すべきだと考えたら、あなたにもそれなりの心の準備が必要となるでしょうが……。 (長い間まがある。彼はレズリーが答えるのを待っている。しかしレズリーは目の前を見つめたままである。) もしもおっしゃることはないなら、わたしは事務所に帰ります。

レズリー (相変わらずジョイスの方を見ることなく) これを読んだ人は、どう思うでしょう？

ジョイス あなたが意図的に嘘をついていた、と。

レズリー いつ？

ジョイス 少なくとも過去六週間ハモンドとは何の接触もなかったと断言した時です。

レズリー 何もかも、とてもショックだったんです。あの恐ろしい夜の出来事は悪夢でした。細かなことを一つくらい忘れていても、そんなに不思議じゃないでしょう？

ジョイス あなたはあの夜のハモンドとの遣り取りを、とても詳細なところまで思い出し、見事に再現してみせた。だから、実はハモンドはあなたのたつでの願いでバンガローに來たのだという、その極めて大事な点を忘れていたとは、不思議でなりません。

レズリー 忘れてはいませんでした。

ジョイス では何故隠していたんです？

レズリー 怖かったんです。わたしが招待したと認めたら、あなた方はわたしの話を信じてくれなかったでしょう。……多分わたしが馬鹿だったんです。度を失っていたんです。それに、ハモンドとは最近接触がなかったと一旦言ってしまった以上、それで通すしかなかった。

ジョイス どうしてよりによってロバートが留守の晩にハモンドを呼んだのか、そのところの説明は求められるでしょうな。

レズリー (声の調子が変わる。) ロバートの誕生日のためにサプライズを準備していたんです。あの人は猟銃を欲しがっていました。わたしはそうしたことには全く無知でしょう？——だからジエフに相談したかったんです。わたしに代わって何か見繕みづろってくれないかと。

ジョイス どうも手紙の文言を良く憶えていらつしやらないようだ。もう一度お読みになりますか？

レズリー (ざっと身を引いて) 厭いやです。読みたくありません。
ジョイス では、わたしが読むしかない。「ロバートは今晩留守です。どうしてもあなたに会わなければ。十一時に來て。わたしは必死です。もし來てくれなかったら、後はどうなっても知りません。車では近づかないで。レズリー」……これが、そう親しくもない男に、猟銃を買うために相

談に乗ってほしいから來てくれ、という手紙に見えますか。

レズリー 感情的で大袈裟、——確かにそう。でも、わたし、実際そんな風を書く癖があるんです。

馬鹿げていることは認めます。

ジョイス どうやらわたしは誤解していたようだ。あなたはとても控えめで冷静な女性だと思つていた。

レズリー それに、ジエフは「それほど親しくない人」じゃない。病氣の時、母親のように看病してあげた。

ジョイス ところで、あなたはあの男をジエフと呼んでいたんですか？

レズリー 皆んなそう呼んでいました。「ハモンドさん」だなんて、誰にも考えられなかった、——そういう人だった。

ジョイス どうしてあんな遅い時間に呼んだんです？

レズリー (冷静さを取り戻して) 十一時はそんなに遅い時間かしら。あの人はあちこちで夕食をとっていましたから、十一時というのは家に帰る途中ちよつと寄るのに丁度好いい時間だと思つたんです。

ジョイス では、何故車で來ないように頼んだんです？

レズリー (肩をすくめて) お判りでしょう？——中国人のボーイたちはゴシップが大好きなんです。もし車の音を耳にすれば、誰か來たことが判る。無邪氣な目的で來たとは絶対考えないでしょう。

ジョイスは立ち上がり、部屋の中を一、二度行き来する。それから椅子の背に手を置いて、重々しい調子で話し出す。

ジョイス クロスビー夫人、真面目に話をしたい、極めて真面目に。この裁判は比較的順調に進んでいた。ただ一つ説明が必要だと思ったのは、わたしの見たところ、あなたはハモンドが床に倒れた後も銃を撃ち続けた——四発も——その点だけだった。繊細で、育ちの良い、洗練された御婦人が、怯えていたとはいえ、全く制御の利かない狂乱の状態に陥入るなどということは納得し難かった。しかし、まあ、勿論そういうこともあるのだ、と認めましょう。なるほどジェフリー・ハモンドは皆から好かれ、高く評価されてはいたが、今あなたが正当防衛を主張しているような犯罪をおかしかねない男であることは十分に証明できるものと思った。ハモンドの死後、彼が中国人の女と暮らしていたことが判明した。あれで決まりだった。あれがなければ、彼に対する同情はあるいは残ったかもしれない。しかし、あれで彼は全ての同情を失った。中国女との関係が我々イギリス人に与える嫌悪感、わたしはそれを最大限利用することにした。つい先刻旦那さんに、間違いなくあなたは無罪放免になるだろうと話したが、それは単に彼を勇気づけるためだけではない。わたしは陪審員が協議のために別室に移ることすらないだろうと信じていた。(二人は互いの目を覗き込む。レズリーは奇妙なほどにじっとしたままだ。あたかも蛇に魅入られて動けなくなった小鳥のようである。)ところが、この手紙が事件に全く新しい、異なった様相を与えた。わたしはあなたの法的アドバイザーだ。法廷ではあなたの代理だ。わたしはあなたの話を

あなたが語ったとおりに受け止め、その線に沿って弁護をする。わたしは、あなたの陳述を信じているかもしれないし、疑っているかもしれない。しかし、弁護人の義務は陪審員を説得すること、——今皆さんの前に提示された証拠から被告に有罪の評決を下すことは正しくない、と陪審員を説得することだ。弁護人が個人的に、依頼人は無罪だと考えているのか、有罪だと考えているのかは問題ではない。

レズリー 何をおっしゃりたいのか分かりません。

ジョイス ハモンドがあなたの招きで……こう言って良ければ、あなたのヒステリックな催促でやって来たことを否定はしないでしよう？

レズリーは暫く答えない。考えている様子。

レズリー 家のボーイが自転車で手紙を届けました、あの人のバンガローに。それは調べればすぐに判るでしょう。

ジョイス 皆さんがあなたより馬鹿だと期待してはいけません。手紙の存在が判れば、これまでは誰も考えたことのない疑いが人々の頭を過ぎる。手紙を読んだ時わたしがどう思ったかは言わないでおきます。また、あなたには、死刑判決を避けるために必要なこと以外のことは話してほしくない。

レズリーは突然身を縮め、気を失って床に崩れ落ちる。ジョイスが彼女を受け止めようとするが間に合わない。水はないかと部屋を見回すが見つからない。一瞬ドアの方に目をやる。が、邪魔されるのを嫌って、助けは求めない。レズリーの横に膝をついて回復を待つ。やがてレズリーが目を開ける。

ジョイス じっとしていなさい。すぐに良くなるから。

レズリー 誰も入れないで。

ジョイス 分かっています。安心して。

レズリー わたしを絞首刑にはしないわよね。

彼女はヒステリックに泣き始める。ジョイスは小声で彼女を落ち着かせようとする。

ジョイス しー。声を立てないで。しー。大丈夫だから、大きな声を立てないで。気をしっかり持つ

て、大丈夫だから。

レズリー ちょっと時間をちょうだい。

彼女が自制を取り戻そうとしているのがはっきり見て取れる。やがて、彼女は落着きを取り戻す。

ジョイス (不本意ながらも、称讃の念を込めて) あなたは大した人だ。それは誰にも否定できない。レズリー 立たせて。気を失うなんて、わたし、なんて馬鹿なんでしょう。

ジョイスはレズリーに手を貸して、立ち上がるのを助け、彼女を椅子に座らせる。レズリーは疲れ切った様子である。

ジョイス 少しは良くなりましたか。

レズリー (目を閉じたまま) 暫く話しかけないで。

ジョイス 分かりました。

レズリー (やがて、ちょっと溜息をついて) どうやら何もかもメチャメチャにしてみましたみたいですね。

ジョイス 残念ながら……。

レズリー ロバートにとってです。わたしにとってではありません。あなたは最初からわたしを信じていなかった。

ジョイス それはどうでもいいことでしょう。

レズリーはジョイスに一瞥を与えると、下を向く。

レズリー 手紙を取り戻すことはできますか？

ジョイス (困惑を隠すために眉をしかめて) 持主に売る気がなかったら、何も言ってこなかったでしょう。

レズリー 誰が持ってるの？

ジョイス 例の中国人です、ハモンドと同棲していた……。

レズリーは本能的に拳を握りしめる、が、また自制を取り戻す。

レズリー 大金を要求するでしょうね。

ジョイス 恐らく女は手紙の価値を知り尽くしている。かなりの額でなければ手放ささないでしょう。

レズリー (嘆れ声で) わたしを絞首刑にするなんてことはなさらないでしょう？

ジョイス (幾分苛々した様子で) こちらにとつて不都合な証拠品を手に入れることがそんなに簡単なことだと思いませんか？

レズリー あなたはあの女は売るつもりでいるとおっしゃったわ。

ジョイス しかし、わたしに買うつもりがあるかどうかは分からない。

レズリー どうして？

ジョイス あなたが頼んでいることがどんなことなのか解っていないようですね。いいですか、恰好

をつけるつもりはありませんが、わたしはこれまでずっと正直な人間として生きてきたつもりです。あなたの頼んでいるのは、証人を買収するのと同じことなんですよ。

レズリー (声を上擦らせて) わたしを救えるが救うつもりはない、そうおっしゃるの？ これまで、わたし、あなたにどんな害を与えました？ あなたがそんな冷酷になれるはずがない。

ジョイス 冷酷に聞こえたとしたら、申し訳ありません。わたしはあなたのために最善を尽くしたい。しかし、弁護士は依頼人に対してだけでなく、自分の職業に対しても義務を負っているのです。

レズリー (動揺して) じゃ、わたしはどうなるの？

ジョイス (重々しく厳粛に) 法を曲げることはできない。

レズリーは青ざめ、震えが体を走る。彼女の声は小さく、低くなる。

レズリー 全てをあなたの手に乗ねます。勿論、違法なことを頼む権利がないことは解っています。わたしは自分のためというより、ロバートのためにお願いしていたのです。でも、もしもあなたが全てをお知りになれば、わたしのことも可哀相だと思ってくださるはずですよ。

ジョイス ポブ……可哀相に、有罪となれば、あいつはどうなることか。あいつは無罪を信じ切っている。

レズリー わたしが縛り首になったとしても、ジェフ・ハモンドが生き返るわけではありません。

ジョイスが状況を考えている間、暫しの間がある。

ジョイス （ほとんど自分自身に向かって）時々思うんですが、我々は名誉を重んじるが故にこれらできない、あれはできないと言うが、本当は虚栄心の為ではないのか。この手紙をどう説明したらいいのか、わたしには判らない。しかしあなたに尋ねる勇氣はない。この手紙から、あなたが本当は挑発はなかったのにハモンドを殺した、と結論づけるのはフェアではないのでしょうか。（感情を昂ぶらせて）わたしはボブが大好きだ、可笑しなほどに。ねえ、あいつとは長い知合いなんです。そのあいつの人生も台無しになってしまいかもしれない……。

レズリー わたしのために何かをしてほしいと頼む権利のないことは分かっています。でもロバートは、……あの人はとても優しく、純朴で善い人です。これまで誰にも何の害も与えたことはない。あの人を救ってやることはできませんか、この苦しみ、この恥辱から。

ジョイス ボブにとってはあなたがこの世の全てなんです。

レズリー そう思います。あの人が与えてくれた愛、その愛にわたしは心から感謝しています。

ジョイス （決意を固めて）できるだけのことをしましょう、あなたとボブのために。（レズリーは安堵して小さく喘ぐ。）しかし自分が間違ったことをしていると解らないでそうしているとは考えないでください。わたしは間違ったことをやっている。目を開けてそうしているんです。

レズリー 苦しんでいる女を救うのは間違ったことであるはずがありません。あなたは誰にも何の害も与えていない。

ジョイス 解ってない。まあ、当然ですが。この件で議論するのは止めましょう。……ボブの経済状態についてはご存じですか。

レズリー 錫の鉱山の株をたくさん持っています。それに二、三、ゴム農園からの配当もあります。

お金は調達できると思います。

ジョイス その金が何のためか、それは言わなくてはならない。

レズリー 手紙を見せることが必要だと？

ジョイス 見せたくないんですね。

レズリー ええ。

ジョイス 裁判が終了するまで見せないで済むよう、最大限やってみましょう。ボブも重要な証人の一人だ。今までどおり、あなたの無実を全面的に信じて証言することが必要だ。少しでも疑念があつてはまずい。

レズリー で、裁判の後は何？

ジョイス 見せないで済むよう最善を尽くします。

レズリー わたしのためじゃないんです、——あの人のために。あの人は、わたしへの信頼を失えば、全てを失うことになる。

ジョイス 不思議ですね、——十年も一緒に暮らしてきて、妻のことが全く解っていないとは。恐ろしいことだ。

レズリー あの人は、自分がわたしを愛していることは分かっています。それ以外は問題ではありません。

せん。

ジョイス (ドアのところへゆき、それを開ける。) パーカーさん。そろそろ帰ることにします。

パーカー夫人が再び入ってくる。

パーカー夫人 あれまあ、クロスビー夫人、顔が真っ青。幽霊でも見たみたい。ジョイスさんに何か酷いことを言われたんじゃないやありませんよね？

レズリー (本能的に社交上のマナーを取り戻して、愛想よく微笑む。) いいえ、何も。ジョイスさんは親切そのものでしたわ。多分このところずっと緊張していたから、ちよつと疲れが出たんです。(彼女はジョイスに手を差し出す。) ごきげんよう。わたしのために色々とお骨折りにいただいて、ありがとうございます。どんなに感謝しているか、言葉になりません。

ジョイス 次に会えるのは、明日の朝、裁判の直前でしよう。

レズリー わたし、その前にどうしてもやっておきたいことがあるんです。今パーカーさんのために、レースの襟飾りを編んでいるんですけど、ここを出る前にそれを仕上げてしまいたいです。

パーカー夫人 素敵。でも勿体なくて、身につける気にはなれないでしょうね。クロスビーさんの編むレースは、そりゃア美しいんです、ご覧になったらさきつと驚きますよ。

ジョイス 知っています。

レズリー わたしにできるのは、それくらい。

ジョイス では、パーカーさん、ごきげんよう。

パーカー夫人 さようなら。失礼します。

彼女は出てゆく。レズリーが続く。ジョイスは書類を集める。ドアにノックの音。

ジョイス どうぞ。

ドアが開きオン・チャーセンが入ってくる。

オン・チャーセン 先生、お忘れではないと思いますが、十二時半にリード・アンド・ポロック社のリード氏と面会のご予定になっています。

ジョイス (腕時計を見て) 待たせておいてくれ。

オン・チャーセン かしこまりました。(彼はドアのところに行き、外に出かかるが、ふと思いついたように、立ち止まる。) 先生、わたくしの友人に伝えておいた方が良く、何かございますか？

ジョイス 友人？

オン・チャーセン クロスビー夫人が故ハモンド氏に書いた手紙の件ですが。

ジョイス (何気なく) ああ、忘れていた。夫人に話したが、そんな手紙は書いていないとのことだっ

た。きつと偽物だ。

彼は目の前の書類の中から手紙を取り出し、それをオン・チャーセンに手渡す。オン・チャーセンはそれを無視する。

オン・チャーセン では、もし友人が手紙を檢察に持って行っても、ご異存はないということですね？
ジョイス そうだ。だが、その友人にとつて、それでどんな良いことがあるのかな？ 分からんね。
オン・チャーセン 友人は、正義が行なわれるようにすることが自分の義務だと考えています。

ジョイス （厳しい顔つきで） オン君、わたしは、誰かが自分の義務を果たそうとする時、それを邪魔するような人間ではない。

オン・チャーセン 分かりました。しかし、先生、わたくしがクロスビー事件を検討してみたところで、は、このような手紙が法廷で提示されれば、依頼人にとつてダメージになると考えますが。

ジョイス オン君、法律に関するきみの見識にはいつも一目置いてる。

オン・チャーセン そこで、ふと思つたのですが、友人がその女性を説得して、手紙をこちらに渡してもらえれば、いろいろと面倒が省けるのではないのでしょうか。わたくしから頼んでみてもかまいませんが。

ジョイス きみの友人とやらはなかなかの商売人のようだが、どんな条件なら手紙を渡してくれるのかな？

オン・チャーセン 手紙を持っているのはその友人ではありません。

ジョイス 別の友人がいるわけだ？

オン・チャーセン 手紙を持っているのは中国人の女性です。彼の親類なのです。その女性は無知でして、彼が言うまで手紙の価値を知らませんでした。

ジョイス で、その友人は手紙には幾らの価値があると？

オン・チャーセン 一万ドルです。

ジョイス なんと、まあ。一万ドルもの金をクロスビー夫人がどこから調達できるというのかね。言つただろう？——手紙は偽物だ。

オン・チャーセン クロスビー氏はベコン・ゴムの株式の八分の一、それとケラントン・リバー・ゴムの株式の六分の一を所有しています。わたくしの友人の中に、それを担保にクロスビー氏に融資してもよいと言う者がいます。

ジョイス オン君、きみは交友範囲が広いな。

オン・チャーセン はい、先生。

ジョイス きみの友人たちに言つてくれ、——地獄に墜ちろつてね。わたしはクロスビー夫人に五千ドル以上鑑^{びた}一文払う必要はないと言つつもりでいる。簡単に説明のつく手紙なんだ。

オン・チャーセン 中国人の女性は手紙を売りたいと言つていて、友人は彼女を説得するのに苦労したそうです。一万ドル以下では手放さないでしょう。

ジョイス しかし大変な額だ。

オン・チャーセン クロスビー氏はきつとお払いになるでしょう、奥さんが縛り首になるのを見るくらいなら。

ジョイス どうしてきみの友人は一万ドルと決めたのかね？

オン・チャーセン 隠すつもりはありませんので申し上げますが、いろいろ調べた結果、クロスビー氏

に集められるのは一万ドルが限度だろうという結論になったそうです。

ジョイス そんなことだろうと思った。一応、クロスビー氏に話してみるよ。

オン・チャーセン クロスビー氏はまだここにいらつしやいます。

ジョイス どうして？

オン・チャーセン 残された時間はほとんどありません。この件は、わたくしの考えでは、一刻の猶予も許されません。

ジョイス なら、さつさと言いたまえ。

オン・チャーセン 先生がクロスビー氏とお話なさりたくなることがあるかと思ひ、待っていてくださ

るよう僭越ながらわたくしがお願ひしました。もし今ご都合がよろしくてクロスビー氏とお話なさるようなら、昼食のとき友人に結果を伝えられますから。

ジョイス その中国人の女は今どこに？

オン・チャーセン 友人の家にいます。

ジョイス 事務所の方に来てくれるかな？

オン・チャーセン 先生がその女性のところへお出でになった方がよろしいかと思ひます。わたくしが

今夜お連れします。そこで手紙を渡してくれるでしょう。ついですが、その女性は本当に無知で、小切手というものが何か解っていません。

ジョイス もともと小切手で払おうとは思っていなかったよ。現金を持ってゆく。

オン・チャーセン 一万ドル以下なら時間の無駄ですから。

ジョイス 分かっている。

オン・チャーセン では、先生がお会いになりたがっていると、クロスビー氏にお伝えしましょうか。

ジョイス オン・チャーセン。

オン・チャーセン はい。

ジョイス 他に知っていることはないのかね？

オン・チャーセン はい、何も。どうしてそんなことをお尋ねに？ 秘書が雇用主の信賴を勝ち得るた

めには何の秘密も持つてはならない、——それがわたくしの考えです。

ジョイス クロスビー氏を呼んでくれ。

オン・チャーセン かしこまりました。

彼は出てゆく。すぐにまたドアが開いて、クロスビーが入ってくる。

ジョイス ボブ、待っていてくれて有難う。

クロスビー おまえさんがどうしても待ってると、——秘書がそう言った。

ジョイス （できるだけさり気ない調子で）ボブ、ちよつと面倒なことが起こってね。ハモンドが殺された夜、奥さんが彼に手紙を出していたんだ、バンガローに来てほしいという手紙を。

クロスビー しかし、そんなこと有り得んだろう。ハモンドとは何の接触もなかったと、いつも言ってたんだ。俺の知ってる範囲では、あいつはハモンドと二ヶ月は会ってなかった。

ジョイス しかし事実手紙が存在するんだ。ハモンドが同棲していた女が持っている。

クロスビー 何のために手紙なんか書いたんだ？

ジョイス きみの誕生日に贈り物をしたというんで、ハモンドのアドバイスが欲しかったそうさ。

きみの誕生日は丁度あの頃だったよな？

クロスビー そうだ。今から二週間前だ。

ジョイス あの悲劇であの時奥さんはかなり感情的になっていた。だから手紙を書いたことを忘れてしまっていたんだ。それで、ハモンドとは何の接触もなかったと言ってしまった。一度言っってしまった以上、間違いだっただけとは怖くて言えなかったんだ。

クロスビー どうして？

ジョイス なあ、ボブ、確かにまづいことではあるが、不自然なことではない。

クロスビー しかし、レズリーらしくない。あれが何かを怖がったことなんて一遍もない。

ジョイス 滅多にあるような状況じゃなかったからね。

クロスビー しかし、それがそんなに問題なのか？ 訊かれたら、ちゃんと説明できるだろう。

ジョイス もしこの手紙が検察側に渡ったら、かなり面倒なことになる。奥さんは嘘をついていたこ

とになるから、いろいろと厄介な質問を受けるだろう。

クロスビー あれはわざと嘘をつくようなことはしない。

ジョイス （僅かに苛立ちを見せて）なあ、いいか、分かってくれ。もしハモンドが招かれざる客ではなく、奥さんに呼ばれて来たとしたら、状況は一変する。分かるだろう？ 陪審員に躊躇いが生じるのは間違いない。

クロスビー 俺が馬鹿なのかもしれないが、よく解らん。おまえさん方、法律で飯を食ってる連中は小っちゃなモグラ塚をでつかい山にしちまいたがる。が、まあいい。ハワード、おまえさんは俺の弁護士というだけじゃない。一番の友達だ、昔からのな。

ジョイス 分かっている。だからこそ、わたしは重大な一歩を踏み出そうとしているんだ、きみには絶対に分かってもらえんだろうが。ともかくその手紙を手に入れなければならない。ボブ、それを買い取る権限をわたしに与えてくれ。

クロスビー おまえさんが正しいと思うことなら、何でもやってくれ。

ジョイス 正しいとは思っていない、しかし、これが一番当を得たことなんだ。陪審員というのは馬鹿だから、扱い得る以上の証拠で混乱させない方がいいと思うんだ。

クロスビー まあ、解ったという風をするつもりはないが、全部任せるよ。おまえさんがいいと思うようにするさ。金は出す。

ジョイス 分かった。じゃ、もうこのことは忘れてくれ。

クロスビー 忘れるさ。レズリーが真つ当じゃない、卑怯なことをしたなんて全然信じられんからな。

ジョイス さあ、倶楽部へ行こう。やたらにハイボールが飲みたくなった。

[幕]

第三幕

第一場

場面はシンガポール、中国人街の或る小さな部屋。壁は漆喰塗りだが、薄汚れている。壁の一つには、染みが浮いて色褪せた安物の中国製の石版画。もう一つの壁には、絵入り新聞から切り抜かれたヌード写真が、額に入れられずに、ピンで留めてある。家具と云ったら、白檀びくぐだんの箱と、低い中国風薬布団わらふとんのベッド、それに漆塗りの高枕たかまくらだけである。舞台後方に閉められた窓、下手しもにドア。時刻は夜で、部屋は傘のない裸電球一つに照らされている。

幕が上がると中国人チュン・シーが阿片のパイプを咥くえて藁布団に横たわっている。脇にはランプが一つと盆が一つ。盆の上には阿片の入ったブリキ缶と長い注射器が二本。チュン・シーは中国の新聞を読んでいる。彼は白いズボンにランニング姿。同じような服装をしたボーイが白檀の箱に腰掛け、ぼんやりした様子で、不思議な中国の曲を横笛で奏でている。チュン・シーが注射針を阿片に浸し、それをランプの炎で暖めた後、パイプに注入すると、大きく吸い込み、やがて濃い煙を吐き出す。ドアのところでは何か擦こするような音がする。チュ

ン・シーが何事か二言三言中国語で言い、ボーイがドアのところに行って少し開ける。ボーイはそこに居る者と短く話すと、振り向いてチュン・シーに何か言う。チュン・シーが答え、菓布団から立ち上がって、阿片吸引の道具を脇に置く。ドアが大きく開かれ、オン・チーセンが入ってくる。

オン・チーセン こちらへ、先生。さあ、お入りください。

トシビ
日除帽を被ったジョイスが入ってくる。

ジョイス 階段で頭をぶつけるところだった。

オン・チーセン これがわたくしの友人です。

ジョイス 英語は話すのかね？

チュン・シー はい、わたし英語とても上手話す。初めまして。ご機嫌いかが？ どうぞ入って。

ジョイス お邪魔するよ。なんとまあ、酷い臭いだ。窓を開けてもらえないかな？

チュン・シー 夜の空気とても良くない。熱出る。

ジョイス 出ても構わないさ。

オン・チーセン 分かりました、先生。わたくしが開けます。

彼は窓のところに行って、それを開ける。

ジョイス (帽子をとり、それを置きながら) 一服やっていたようだね。

チュン・シー はい。お腹おなかとても調子悪い。ちよつと吸う、とても良くなる。

ジョイス さあ、仕事に掛かるう。

オン・チーセン はい。商売は商売と言いますから。

ジョイス オン君、友人の名前は？

チュン・シー わたしいつも同じチュン・シー、そう呼ぶ。店に書いてあった、見なかった？ 雑貨

商チュン・シー。

ジョイス わたしが何のために来たか、知っていると思うが。

チュン・シー はい。わたしの家きてくれて、とてもうれしい。名刺あげる。どうぞ。

ジョイス 必要ないと思う。

チュン・シー わたしとても良い中国のお茶売ってる。本物、スーチョンのお茶。品質ナンバーワン。

他ほかの店よりもっと安く買える。

ジョイス お茶はいらない。

チュン・シー わたしスワトーの絹売ってる。とても最高品質。もっと良いの無い。とても良い背広

出来る。わたしあなた安く売る。

ジョイス 絹もいらぬ。

チュン・シー わかった。これわたしの名刺。チュン・シー、雑貨商、ビクトリア通り二六四。あなた多分明日、明後日、欲しくなるね。

ジョイス 例の手紙は？

チュン・シー 中国人の女もってる。

ジョイス 今どこに居る。

チュン・シー すぐ来るよ。

ジョイス 何故ここに居ないんだ。

チュン・シー だいじようぶ。ここ居る。すぐ来るよ。あなた来るの待ってた。わかる？

オン・チーセン 今すぐ来るよう言ってくれないか。

チュン・シー わかった。今すぐ来るよう言う。(彼はボーイに中国語で二言三言話す。ボーイは喉の奥の方で何か一言二言発すると、出てゆく。チュン・シーがジョイスに向かつて) 座って。いい？

ジョイス 立っていたいんだ。

チュン・シー (ジョイスに煙草の入った緑色の缶を渡そうとしながら) 煙草吸う？ とても良い煙草。みんな同じ、"スリー・キャツスルズ"。

ジョイス 今は吸いたくないね。

チュン・シー (ジョイスに) あなた、中国のお茶とても安く買いたい。品質ナンバーワン。

ジョイス いい加減にしてくれ。

チュン・シー オーライ。わたし、儲け無い。多分あなたスワトーの絹、好き。違う？ なら翡翠見たい？ ネットレス持つてる。品質ナンバーワン。千ドル。わたし、あなた安く売る。奥さん、とてもいいプレゼント。

ジョイス いい加減にしろ。

チュン・シー オーライ。わたし煙草吸う。

ドアが開いて、ボーイが盆を手に再び入ってくる。盆の上にはお茶の入った茶碗が幾つか。彼はその一つをジョイスに渡そうとする。ジョイスは首を振って、顔を背ける。他の者たちは茶碗を取る。

ジョイス 一体女は何をぐずぐずしてるんだ。

オン・チーセン すぐ来ると思います。

ドアの外に床を擦るような音がする。

ジョイス どんな女か興味津々だな。

オン・チーセン この友人が言うには故ミスター・ハモンドは彼女の言いなりだったそうです。

チュン・シー 彼女英語全く駄目。マレー語と中国語だけ。

そう言っている間に、ボーイがドアのところへ行き、それを開ける。中国人の女が入ってくる。女は絹の腰巻、ブラウスの上にモスリンのコート姿。重そうな金の腕輪、金の首飾り、漆黒の髪には金のヘアピン。濃い白粉、赤く塗られた頬と唇、細い三日月型に描かれた黒い眉。彼女は薑布団のところへ歩いて行って、その端に腰掛け、足をぶらぶらさせる。オン・チーセンが中国語で何か話しかけると、短く答える。ジョイスには何の注意も払わない。

ジョイス 手紙は持っているんだな？

オン・チーセン はい。

ジョイス どこだ。

オン・チーセン この女は教養がありませんから、手紙を渡す前にお金を見たいのだと思います。

ジョイス 分かった。

中国人の女は缶から煙草を取り出すと、火をつける。目の前で起こっていることに何の注意も払っていないように見える。ジョイスが一万ドルを数え、オン・チーセンに渡す。オン・チーセンは自分で数え直す。チュン・シーがそれを見ている。三人とも厳肅かつ事務的である。中国人は皆、妙に落ち着き払っている。

オン・チーセン 確かに一万ドル。(中国人の女がコートのポケットから手紙を取り出し、オン・チーセンに渡す。オン・チーセンはそれをちらっと見る。) 本物です。

彼はそれをジョイスに渡す。ジョイスは黙ってそれを読む。

ジョイス 一万ドルに値するものとも思えんな。

オン・チーセン 絶対後悔なさいと思います。状況を考慮すれば、一万は、それこそ無料みたいなに安いと言えます。

ジョイス (皮肉っぽく) きみはわたしにそれなりの敬意を払ってくれているはずだから、市場価格以上の値をつけることはあるまい。

オン・チーセン 先生、他に今夜わたくしにして欲しいことはございますか？

ジョイス ないと思うね。

オン・チーセン そういうことでしたら、もしよろしければ、わたくしはここに残って、この友人と話をしたいのですが。

ジョイス (嘲弄するように) 不正利得の分配を鳩首協議しようというわけだ。

オン・チーセン 遺憾ながら、先生、その単語は勉強したことはありませんが。

ジョイス 辞書で引いてみるさ。

オン・チーセン では、後で早速引いてみます。

ジョイス オン・チーセン、きみの取り分は幾らになるのかな？
オン・チーセン 「働き人がその報酬を受けるのは当然である」とわたくしたちの主もおっしゃって
います。(注・新約聖書「テモテへの第一の手紙」5の18)

ジョイス オン君、きみがキリスト教徒だったとは知らなかったよ。

オン・チーセン 違います。わたくしはキリスト教徒ではありません。

ジョイス なら、イエス様はきみの主ではないだろう。

オン・チーセン わたくしは英語のイデオムを使つたまでです。実際わたくしは故ハーバート・ス
ペンサーの弟子です。また、ニーチェ、バーナード・ショー、H・G・ウェルズにも大変影響を
受けました。

ジョイス どうりで、敵わないわけだ。

彼が退場すると、カーテンが素早く下りる。

第二場

場面は第一幕に同じ。クロスビーのバンガローの居間。

午後の五時頃。夕方前の光は柔らかで美しい。

カーテンが上がった時、舞台上には誰も居ない。が、すぐに車の停まる音がして、ジョイス
夫人とウイザーズがベランダの階段を上つて入ってくる。すぐ後ろに、ボーイ長ともう一人
中国人の召使。ボーイ長は大きな籠を抱え、もう一人の中国人はスーツケースを持っている。
ジョイス夫人は四十歳くらい。小太りで、血色が良く、容色好し。

ジョイス夫人 あら、なんて侘びしいこと。一目で、女手のなかったことが判る。

ウイザーズ 確かに、ちよつと侘びしいですね。

ジョイス夫人 きつと、こんなことだろうって思つた。だから早くここに来たかったの。レズリー
が到着する前に、ちよつとぐらい、しておいてあげられることがあるかもつて。

彼女はピアノのところへ行き、蓋を開けると、譜面台に楽譜を置く。

ウイザーズ 花でもあると良いんですがね。

ジョイス夫人 あの惨めつたらしいボーイたちに花を摘んでおこうなんてセンスがあるかしら。(籠
を抱えたボーイ長に)ボーイさん、氷は大丈夫？

ボーイ長 はい、奥さん。

ジョイス夫人 どこか、溶けない所に置いといて。それと、お花はないの？

ボーイ長 わたし、見てくる。

ジョイス夫人 (もう一人のボーイに) ねえ、それはあたしのバッグ。客室へお願いね。

ウィザーズ 一体全体どうしてクロスビー夫人はここへ戻ろうなんて気になれるんですかね。

ジョイス夫人 ねえ、あなた、他に選択肢がないんだからしょうがないでしょう。クロスビーさんは別荘を五つも六つも持つてるわけじゃない。家が一つしかないんだから、そこに住むしかない、たとえ何があってもね。

ウィザーズ それにしたって、わたしならすぐ帰ってくるなんてことはしませんね。

ジョイス夫人 あたしも、ちよつと待たらつて言ったのよ。裁判が終わったら二人であたしの家へ来たら?—暫くあたしの家に滞在して、それから休暇を取って、どこかへ旅行にでも行つたらつて。

ウィザーズ そうするのが一番ですよ。

ジョイス夫人 でも二人は断つた。ロバートは農園を離れられないって言うし、レズリーは旦那さんを一人にはできないって。なら、あたしとワードがここへ邪魔しますってことにしたの。一日でも二日でも誰かが一緒の方が気が紛れるでしょう?

ウィザーズ (笑みを浮かべて) それに、あなたは祝杯を挙げる機会を奪われなくなかった?

ジョイス夫人 (陽気に) あなた、あたしの「百万ドルカクテル」まだ飲んだことないんでしょう? マラヤじゃ有名なんだから。レズリーが逮捕された時、あたし、厳かに誓いを立てたの、——彼女が保釈されるまでは絶対作らないって。それでずっと今日つて日を待ってたんだから。誰にも邪魔させない。

ウィザーズ それで氷つてわけですね。

ジョイス夫人 それで氷つてわけ。あなた、若い割に賢いわね。みんなが到着したらすぐ作り始めるつもり。

ウィザーズ ご自分で。

ジョイス夫人 自分で。自慢じゃないけど、あたしより美味しいカクテルを作れる人はどこを探したって居ないわ。

ウィザーズ (ニヤツとして) どうやら、誰も彼も、自分の作るカクテルが一番だと思ってるようですがね。

ジョイス夫人 (明るく) そうよ。でも、嘆かわしいことに、皆んな間違ってる。間違ってるのはあたしだけ。

ウィザーズ 神の御意志は計りがたし、です。

二人のボーイが花を生けた花瓶を幾つか持って入ってきて、それをあちこちに配置する。部屋は第一幕と全く同じようになる。

ジョイス夫人 あら、素敵。すっかり居心地が良くなった。

ウィザーズ もうそろそろ帰ってくる頃ですね。

ジョイス夫人 あたしたち早く出たから。でもレズリーは……。レズリーにお祝いを言いたい人はさ

ぞ沢山いるでしょうから、そんなに早くは帰れないと思うわ。

ボーイ退場。

ウイザーズ 帰るまでわたしも待ちましようか？

ジョイス夫人 当然でしょ。

ウイザーズ 司法長官は立派でしたね。

ジョイス夫人 ああなると分かってた。あたし、長官の奥様とは懇意なんだけど、そもそも始めから逮捕なんかすべきじゃなかったって言ってた。でも、男の人って、変に拘こまるところがあるから。

ウイザーズ 陪審員が入ってきて「無罪」と言った時のあの歓声、一生忘れないと思います。

ジョイス夫人 スリルあったわよね。でも、レズリーは全然感情を面おもてに出さなかった。自分とは全く関係ないことみたいに座ってた。

ウイザーズ 夫人が証言した時のあの態度。いや、まったく、凄いな。

ジョイス夫人 ほんとに素晴しかった。あたし、涙が出ちゃった。控えめで、上品で。ハワードは、わたしのこと、衝動的でヒステリックだって思ってるんだけど、レズリーについてちゃ、あんなに自制心の強い女性にこれまでお目に掛かったことないって言ってた。それって本当に褒めてるのよ。なぜって、ハワードはレズリーのことあまり好きじゃないんだから。

ウイザーズ 何故？

ジョイス夫人 男ってそんなものなの。親友が結婚した相手を好きになることは絶対ない。

ボーイ長が布を掛けたレース編みの台を持って入ってくる。

ウイザーズ おや、そりや何だね？

ボーイ長 奥さんのレース台。

ジョイス夫人 (ボーイ長に近づき布を取る。) あら、素敵。わざわざ持ってきてくれたの？

ボーイ長 奥さん喜ぶ思った。

彼はそれを第一幕で置かれていた位置に置く。

ジョイス夫人 ええ、きつと喜ぶわ。あなた、なんて優しいの。(ボーイが出てゆくのを見ながら、ウイザーズに) ねえ、時々あの中国人たちを殺したくなる時があるんだけど、そう思っていると、突然、とつても親切で思い遣りのあることをしてくれるのよね。で、みんな赦しちゃう。

ウイザーズ (レースを見ながら) いやア、美しいですね。これぞまさにレズリーさんにお似合いの趣味だ。

ジョイス夫人 ウイザーズさん、ちょっと恐ろしいことを訊きたいんだけど。あなたがあの夜ここに来た時、ジェフ・ハモンドの遺体はどこにあったの？

ウイザーズ ベランダに。丁度あのランプの真下です。いやア、吃驚びつくりしましたよ、ベランダに駆け上がった途端、死体の上に転びそうになったんですから。

ジョイス夫人 ねえ、考えたことない？——これから先レズリーは、この家に入るたびに、遺体のあった場所を通らなくちゃならないわけでしょう？ それって気味悪くない？

ウイザーズ そんなことは気にならないんでしょう。

ジョイス夫人 有難いことに、レズリーはあたしみたいにヒステリックなお馬鹿じゃないから。でも……、ねえ、あたしなら絶対眠れない。

車の近づく音がする。

ウイザーズ 来たようだ。思ったより早かったですね。

ジョイス夫人 (ベランダへ向かいながら) ええ。きっと、あたしたちの後あと十分もしないで出発したのね。(呼ぶ。) レズリー！ レズリー！

レズリーが入ってくる。続いてクロスビーとジョイス。クロスビーはさっぱりした麻のスーツ姿。レズリーは絹のコートに帽子。

レズリー 早かったですよ？

ジョイス夫人 お帰りなさい。(レズリーの腕を取って) お帰りなさい、我が家へ。

レズリー (ジョイス夫人の抱擁から離れながら) ドロシー。(周りを見回して) 前おんと同等なね。なんて気持ちいいこと。暫くここを離れていたなんて信じられない。

ジョイス夫人 疲れてるでしょ？ ちよっとベッドで横になったら？

レズリー 疲れてる？ わたしこの六週間、休むことしかしていないのよ。

ジョイス夫人 クロスビーさん、あなたもレズリーが戻って幸せね？

ジョイス さあさあ、ドロシー、口を閉じて。そんなに喋りたいなら、わたしに向かって喋ればいい。

ジョイス夫人 いやな人。あなたに話すことなんか何なんにもないわ。一体あなたは何をしたら言うのよ。

レズリー (ジョイスに手を差し出し、魅力的な笑みを浮かべて) 全てをしてくださいましたわ。いくら感謝しても、足りないくらい。このやるせない、待つだけの時間、ジョイスさんがわたしにとってどんなに大きな存在だったか……。

ジョイス夫人 そうね、ワード、なかなか良い演説だったのは認めてあげる。

ジョイス それはそれは。感謝いたします。

ジョイス夫人 でも、もうちよつとぐらい情熱を込めて演説しても良かったんじゃない？

ウイザーズ そうは思いませんね、ジョイス夫人。あの演説があんなに効果的だったのは、ジョイス

さんが極めて冷静に、計算し尽くした上で、いかにも事務的に話したからだと思いますよ。

ジョイス ドロシー、おまえが話していたカクテルを飲もうじゃないか。

ジョイス夫人 ウィザーズさん、手伝って。あのカクテルを作るには、沢山の人に手伝ってもらわなくちゃならないの。

レズリー (帽子を脱ぎながら) あなたの百万ドルカクテルって、手が込んでるから。

ジョイス夫人 (ウィザーズと共に退場しながら) 苛々しちやだめよ。ちよつと時間が掛かるから。

急ぐと美味しく出来ないの。

レズリー わたし、着替えてきます。

クロスビー 必要ないさ。そのままでもビシッと決まってる。

レズリー すぐ戻るから。

クロスビー おまえに折り入って話したいことがあるんだ。

ジョイス じゃあ、わたしは席を外そう。

クロスビー ハワード、是非おまえさんにも居てもらいたい。弁護士としての意見が欲しいんだ。

ジョイス あっ、そう。なら早く話せ。

クロスビー なあ、俺はレズリーをできるだけ早くここから離れさせてやりたい。

ジョイス 暫く休暇を取るのはいいことだと思うよ。

レズリー ロバート、休暇が取れるの？ 取れるんなら、ほんの二、三週間でも嬉しい。

クロスビー 二、三週間じゃ意味がない。永久にここからおさらばするんだ。

レズリー でも、そんなこと、どうしたらできるの？

ジョイス この仕事を辞めるわけにはいかんだろう。こんな良い仕事は二度と見つからんよ。

クロスビー そこがおまえさんの間違ってるよさ。実は、今より良い仕事がありそうなんだ。俺たちはここに住み続けるわけにはいかん。そんなことは無理だ。このパンガローには思い出したくないことがある。どうして忘れられるっていうんだ、あの……

レズリー (身を震わせて) 止めて、ボブ。止めて。

クロスビー (ジョイスに) なあ、確かにレズリーは鋼はがねみたいな神経を持つてるかもしれないが、人間の我慢には限度がある。ここの生活がどんなに孤独なものか分かるだろう？ 俺が外に出ている時こいつがこの部屋でたった一人で座ってるのかと思うと、気がおかしくなる。問題外だ。

レズリー わたしのことはいらないで、ボブ。あなたがこの農園を作ったのよ。あなたがここに来た時は何にもなかった。ここはあなたの子供のようなものなのよ、目に入れても痛くない。

クロスビー しかし、今は大っ嫌いだ。あのゴムの木も、この椰子の木も、どれもこれも大っ嫌いだ。俺はここを出なくちゃならん。おまえもだ。ここに留とどまりたくはないだろう？

レズリー ええ、本当に惨めだった。もうこれ以上大変な目に遭いたくない。

クロスビー 俺たちが平和を取り戻すには、どこか、色んなことを忘れられるところへ行くしかない。ジョイス だが、どうやって他の仕事を手に入れるんだ。

クロスビー そう、そこさ。急にいい話を持ち上がったんだ。で、今すぐ、おまえさん方に相談したいんだ。農園はスマトラなんだが、あそこへ行けば皆んなから離れられる。近くに居るのはオランダ人だけだ。新しい知合いと、新しい生活を始めるってわけさ。問題があるとすれば、レズリー、おまえが寂しいだろうってことだけだ。

レズリー そんなこと問題じゃないわ。寂しいのには慣れてるから。(突然熱を込めて) ああ、ぜひ行きたい。ロバート、わたし、ここに居たくない。

クロスビー じゃあ、それで決まりだ。話を進めて、すぐ纏めよう。

ジョイス 金はこと同じくらい稼げるのか？

クロスビー もっと稼げるさ。なんとたって、俺はあの碌でもないロンドンの会社のために働くんじゃない、俺自身のために働くんだから。

ジョイス (吃驚して) そりゃ、どういうことだ？ まさか農園を買おうというんじゃないだろうな？

クロスビー 買うのさ。駄目か？ なぜ他の連中のために汗水垂らして働き続けなくちゃならないんだ。これは又と無いチャンスだ。今はマラッカの中国人の所有なんだが、そいつがちよっと資金繰りに困ってな、明後日までに三万ドル用意できるなら売ってもいいと言ってるんだ。

ジョイス しかし、どうやって三万ドルも集めるんだ。

クロスビー こっちへ来てから一万ドル貯めた。チャーリー・メドーズが、それを担保に貸してくれる。

レズリーとジョイスは困惑の表情で目を合わせる。

ジョイス 卵を全部一つの籠に入れてしまうのは、ちよっと危ないんじゃないか？

レズリー ロバート、わたしのためにそんな危険なこと、してほしくないわ。わたしのことなら心配しないで。大丈夫だから。ここでも充分やっていけるから。

クロスビー ナンセンス。レズリー、おまえは今先、どんなことをしてもここには居たくないって、そう言ったじゃないか。

レズリー 何も考えないで言ってしまったのよ。ここから逃げ出すのは間違ってる。分別のある人ならここに留まって、成行きを見守るわ。これまでだって皆んな親切に優しくしてくれた。これからだっけとそうしてくれる。わたしたちが穏やかに暮らせるように、できるだけのことをしてくれるわ。

クロスビー なあ、おまえ、ちよっとしたリスクを怖がっちゃいけない。大金を稼ぐには、どうしたって、少しぐらいリスクを冒さなくちゃならないんだ。

ジョイス しかし、中国人が持っている農園は芳しくないものが多いからな。分かるだろ？——中国人入ってのは出鱈目でいい加減な奴が多い。

クロスビー この物件に関しちや絶対そんなことはない。持主は中国人とは思えないぐらい進歩的だ。ヨーロッパ人の監督を置いてるんだ。だから、闇雲に崖から飛び降りるのは違う。この申し出は至って真つ当なものだ。なに、十年もすりや引退できるぐらい金が貯まるさ。そうしたらイギリスに帰って、貴族みたいに暮らすんだ。

レズリー ロバート、正直、わたしここに居たいの、本当に。ここに愛着があるし。時間が経って、嫌なことを忘れれば……

クロスビー どうして忘れられるっていうんだ。

ジョイス まあ、何にしても、よく考えもしないで決めてしまうような問題じゃない。当然スマトラへ行って、自分の目でじっくり見て、ちゃんと確かめたいだろう。

クロスビー まさに、そこなんだ。今すぐ決めなくちゃならないんだ。三十六時間以内に決めないと、没^{ぼつ}になっちまう。

ジョイス しかし、ボブ、現地を見ないで三万ドルも払うなんて、無謀だよ。まあ、植民地に来る人間は無謀な連中が多いが、それにしたって限度があるだろう。

クロスビー そんなに馬鹿にしなさんなって。俺もそれほど間抜けじゃない。ちゃんと調べてみたま。これは少なくとも五万ドルの価値はある物件だ。事務所の方に書類が揃ってるから、いま行って取ってくる。おまえさんの目で確かめてくれ。バンガローの写真もある。レズリーが見たいだろうからな。

レズリー 見たくなんかない。

クロスビー まあまあ。そんなヒステリックになりなさんな。あれを見りや是非行きたいって気になるさ。それに今回は俺のやりたいようにやらせてくれ。俺もここを出たいんだ。これ以上ここには居たくない。

レズリー (悲痛な表情で) どうして? どうしてそんなに頑固なの。

クロスビー まあまあ、落ち着いて。聞き分けのない子だな。じゃ、ちょっと行って取ってくる。すぐ戻るから。

彼は出てゆく。暫し沈黙がある。レズリーが恐怖に打たれた表情で、訴えるようにジョイスを見る。ジョイスは困り果てた様子を見せる。

ジョイス 手紙を手に入れるのに一万ドル掛かった。

レズリー これからどうするの?

ジョイス (惨めな表情で) わたしに何ができるといふんです。

レズリー お願ひ、今はまだあの人に話さないで。ちよつと時間をちようだい。わたし、精^{せい}も根^{こん}も使^{つか}い果たした。これ以上は耐えられない。

ジョイス ボブの言ったことを聞いたでしょう? あいつは今すぐ一万ドルを必要としている、農園を買うために。しかし無理だ。金は使ってしまったんだから。

レズリー だから、ちよつと時間をくださいませんか。

ジョイス わたしには一万ドルも用立てる余裕はない。

レズリー そんなことしてもらおうとは思っていません。お金は何かします。

ジョイス どうやって? できっこないことはあなたにだって分かつてるでしょう? 二週間ぐらいなら喜んで融通してさしあげるが、しかし、…:息子の教育のために蓄えてきた金だ…:

レズリー (ジョイスの言葉を遮^{ひら}って) 一月^{ひとし}だけでも何とかありませんか。一月いただければ、その間に何とか機会^{あひだ}を見つけて、あの人に心の準備をさせられる。少しづつ説明できるかもしれない

い。

ジョイス しかし、農園を買う契約を結んでしまえば、一万ドルは消えてしまう。駄目。駄目です。それはできない。冷たくしたいわけじゃありませんが、お金を貸すわけにはゆかない。

レズリー ところで、手紙は今どこに？

ジョイス このポケットです。

レズリー ああ、わたし、どうすればいいの？

ジョイス 心から同情します。

レズリー わたしに同情してくださいる必要はありません。わたしは問題じゃありません。問題はロバ

ート。このことを知ったら、あの人どんな気持になるか……。

ジョイス 何か他に手があったら……。わたしには思いつかない。

レズリー そうね。そう、あなたのおっしゃるとおりね。できることは一つしかなさそう。あの人に話しましょう。話して全て終りにしましょう。わたしも疲れた。

クロスビーが手に書類の束と、二枚の大きな写真を持って入ってくる。

クロスビー レズリーの件がなかったら、勿論先週スマトラへ調査に行ってたんだ。が、まあ兎も角、
ハワード、この報告書を見てくれ。

ジョイス なあ、ボブ、この裁判に掛かった費用がどのくらいか判るか？ かなり掛かったんだ。

クロスビー おまえさん方、弁護士つてのは泥棒みたいなもんだからな。お蔭で現金が少し不足する
だろうが、おまえさんのことだ、この件が片付くまで、少しぐらいは待ってくれるだろう。俺は
信用できる人間だ。なんなら利子を付ける。

ジョイス 掛かった費用がどのくらい判っていないようだな。勿論、急かせるつもりはないが、無
期限つてわけにはいかない。あらかじめ言っておいた方が良いと思うが、清算が終わったとき残
る額は、その危なっかしい事業に乗り出せるようなものじゃない。

クロスビー 主を畏れよつてわけか。で、幾らになるんだ。

ジョイス 弁護士費用を請求するつもりはない。純粹に友人としてきみの弁護を引き受けたんだ。ただ、
急に現金で支払わなくちゃならん出費があった。それは払ってもらおうことになる。

クロスビー 当然だ。弁護士費用が要らんとは、おまえさんはやっぱり好い奴だ。しかし、仕事は仕事
だ、ちゃんと請求してくれ。で、その急の出費とやらだが、幾ら掛かったんだ？

ジョイス 憶えているだろう？——昨日きみに、奥さんが書いた手紙があって、それを手に入れなく
ちゃならない、と話した。

クロスビー ああ。実際、大した問題じゃないと思ったが、しかし勿論全部おまえさんに任せたんだ
から。弁護士さんつてのは、大して重要でもないことを大袈裟に考えるもんだと思ったよ。

ジョイス きみはわたしが適切だと思うように処理してくれと言った。で、所有者から手紙を買い取
ったんだが、大金を払わなければならなかった。

クロスビー 持って回った言い方は止してくれ。おまえさんは必要だと思ったんだらう、なら俺はぐ

ずぐず言わん。で、幾らだったんだ。

ジョイス 一万ドルだ。

クロスビー (仰天して) 一万？ えっ、一万？ そりゃ一財産だ。二、三百って言うかと思つた。

おまえさん、気でも狂ったんじゃないか。

ジョイス もっと安く手に入れられるなら一万も払わなかった、それは解ってくれるだろう？

クロスビー しかし一万つていえば俺の全財産だ。それじゃ俺は乞食になっちまう。

ジョイス そんなことにはならんだろうが、だが農園を買う金はない。

クロスビー しかし何故、勝手にその手紙を法廷に提出させて、どうぞ好きなようにしてくれって言わなかったんだ。

ジョイス それができなかったんだ。

クロスビー どうしてもその手紙を押さえておく必要があつたってことか？

ジョイス もし奥さんを無罪にしたいのなら。

クロスビー しかし……しかし……俺には理解できん。その手紙のせいで有罪の判決が出たかもしれんと言ふんじゃないだろう？ 人間のクズを片付けただけだ、縛り首にはできんだろう。

ジョイス 勿論死刑にはならなかったさ。しかし、傷害致死の判決は出たかもしれん。そうなれば、懲役二、三年は避けられなかった。

クロスビー 二、三年！ レズリーが？ 俺のレズリーが？ こいつにはとても耐えられなかっただろう。……しかし、一体、その手紙には何が書いてあつたんだ。

ジョイス 昨日話しただろう。

レズリー わたしが馬鹿だったの。わたし……

クロスビー (遮って) 思い出した。おまえはハモンドにバンガローに来てほしいと書いた。

レズリー ええ。

クロスビー 何か頼みたいことがあつたとか。

レズリー あなたの誕生日プレゼントを用意したくて。

クロスビー また何故あいつに？

レズリー 猟銃をプレゼントしたかったの。でも、わたし、そういうことは何も知らないし、あの人はなら詳しいだろうから。

クロスビー 俺がああ夜シンガポールへ行つたのは、パーティー・キャメロンが売りがつた新品の猟銃を買うためだ。なのに、どうしても一挺必要なんだ。

レズリー あなたが銃を買いに行くなんて、どうしてもう一挺必要なんだ。

クロスビー (ぶっきらぼうに) おまえにそう言つただろう。

レズリー 忘れてたのよ。何も彼も憶えていられるわけじゃない。

クロスビー いや、おまえは憶えていた。

レズリー あなた、それどういふこと？ なぜそんな言い方をするの。

クロスビー (ジョイスに向かって) おまえさんがその手紙を買つたのは、犯罪じゃないのか？

ジョイス (クロスビーの言葉を真面目に捉えないように努めて) まあ、立派な弁護士が普通やるよ

うなことじゃないな。

クロスビー (なお詰め寄るように) これは犯罪だ、えっ、そうだろう？

ジョイス これまでその事実を心から閉め出すように努めてきたが、しかし、どうしてもはっきりした答が欲しいと言うんなら、残念ながら認めざるを得ないね、——これは犯罪だ。

クロスビー じゃ、何故やったんだ。よりによって、おまえさんが。俺を何から救おうとしたんだ。

ジョイス だから、言っただろう、わたしは……

クロスビー (きつく、恐ろしい表情で) 違う。おまえは間違ってる。

ジョイス まあまあ、ボブ、そんなつかしなないで。きみが何を言いたいのかよく分からんが、陪審員というのは馬鹿なものだ。連中に余計なことは考えさせたくないだろう？

クロスビー その手紙はいま誰が持つてるんだ。おまえか？

ジョイス そうだ。

クロスビー どこにある。

ジョイス 何故知りたいんだ。

クロスビー (凶暴に) くそつたれ！ 見たいんだよ。

ジョイス きみに見せなくちゃならん義理はない。

クロスビー 誰の金で買ったんだ、——おまえのか？ 俺のか？ 俺は一万ドル払わされたんだ。だから、どうしても見る。せめてどこに一万ドルの価値があるか知りたいんだ。

レズリー 見せてあげて。

ジョイスは無言でポケットから札入れを取り出し、そこから手紙を取ると、クロスビーに渡す。クロスビーは無言でそれを読む。

クロスビー (唖れ声で) これは何を意味するんだ。

レズリー ジェフ・ハモンドがわたしの恋人だったということ。

クロスビー (両手で顔を覆って) そんな。そんな。

ジョイス 何故ハモンドを殺したんだね。

レズリー あの人はずっとわたしの恋人だった。戦争から戻ってすぐそういう関係になった。

クロスビー (苦悶の表情で) 嘘だ。

レズリー わたしは週に二、三回或る場所へ車で行った、二人の秘密の家へ。あの人はそこで待っていた。それから、あなたがシンガポールへ出掛けた時は、あの人がここへ来た、夜遅く、ボーイが居なくなってから。わたしたちはしょっちゅう逢っていた。

クロスビー 俺はおまえを信じてた。おまえを愛してた。

レズリー でも最近、一年前頃から、あの人が変わり始めた。何があったのか分からなかった。彼がもうわたしを愛していないなんて信じられなかった。気が狂いそうだった。ああ、あの苦しさ、わたしが耐えていたあの苦しみがあった方にも分かれれば……。地獄巡りをしているようだった。

もうわたしに逢いたがっていないのは分かっていた。でも、彼を放してやるなんてできなかった。

時々嫌われていると感じることもあった。あの惨めさ。惨め。惨めだった。わたしは彼を愛していた。愛したくはなかったけれど、どうしようもなかった。彼を愛している自分が大っ嫌いだった。それでも、あの人がわたしの全てだった。わたしの人生だった。

クロスビー ああ、神様。神様。

レズリー そのうちに中国人の女と一緒に暮らしていると噂に聞いた。信じられなかった。信じようとしなかった。でも、その女を見てしまった。この目で。金のブレスレット、金のネックレスを着けて、村を歩いていった。……中国女。ああ、悍ましい。部落の誰もが女は彼の愛人だと知っていた。擦れ違った時、女がわたしを見た。その瞬間わたしには分かった、——わたしも彼の愛人だと、女が知っていることが。

クロスビー ああ、なんてことだ。

レズリー わたしは彼を呼びにやらせた。どうしても逢いたいと伝えた。手紙を読んだでしょう？

あんなものを書くなんて、どうかした。自分が何をしているのか分からなかった。でも、何も考えなかった。もう十日も逢っていないかったの。十日もよ。最後に別れた時、あの人はわたしを腕に抱いて、キスをして、心配すると言った。なのに……、なのにその足であの女の腕の中へ帰って行ったのよ。

ジョイス そういう碌でなしだ、あいつは。ずっとそうだった。

レズリー あの手紙。わたしたちはいつも用心深く行動していた。彼はわたしからの手紙を読み終えると、必ずその場で破り捨てていた。あの手紙だけ破らずに残すなんて、どうしてわたしに分か

って？

ジョイス 今はそれは問題じゃない。

レズリー 彼が来たから言ってやった、——中国女のこととは知ってるって。彼はスキヤンダルにすぎないと否定した。あの時自分がどうなっていたのか分からない。何を言ったのか憶えていない。ただあの男を憎んでいた。心底憎んだ。あの男のせいだ、自分自身を軽蔑するようになったから。わたしは散々言ってやった。思いっきり傷つけてやった。思いつく限りの言葉で侮辱してやった。顔に唾を吐くことだってできそうな気がした。すると到頭あの男がこつちを向いて、もうウンザリだ、飽き飽きした、二度と顔を見たくない、おまえと居ると死ぬほど退屈だと言った。そして、中国人の女のことは本当だと認めた。もう長年付き合っている、自分にとって本当に意味のあるのはあの女だけで、他の女は皆んな暇つぶしだ。おまえに判って、かえって嬉しいよ、これでやっとおまえも俺を解放してくれるだろう。普通男の人が女に言わないようなことを、次から次へ言った。あんな汚い言葉は街角にいる娼婦にだって言わない。その後何がどうなったのか、自分がどうなったのか、よく憶えていない。気が付くと、ピストルを握んでいた。ピストルを撃っていた。あの男が何か叫んだ。弾が当たったのが判った。あの男はよろめきながらペランダへ向かった。わたしは後を追って、もう一発撃った。あの男が倒れた。わたしはその姿を見下ろして、弾がなくなるまで打ち続けた。

暫しの間がある。クロスビーがレズリーに近寄る。

クロスビー レズリー、俺はおまえからそんなことをされるようなことを何かしたか？

レズリー いいえ。悪いのはすべてわたし。何の言訳いわけもできない。わたしはあなたを裏切った。

クロスビー これからどうしたいんだ？

レズリー あなたが決めて。

クロスビー ここをおさらばしたいと言ったのは、おまえのためだったんだ。あの金だって全部おまえのために貯めたんだ。こうなった以上、俺はここに留とどまるしかない。しかし、おまえがイギリスへ戻って暮らしていくぐらいの金なら、何とかなる。

レズリー イギリスへ戻って、どこへ行けばいいの。わたしに家族はいない、友達も。この世でひとりぼっちの人間なのよ。ひとりぼっち。

クロスビー ひとりぼっち？ どうしてそんなことを。レズリー、俺はずっと、おまえに愛されようと精一杯やってきた。俺が何か間違ったことをしたか？

レズリー ああ、わたしに何が言えて？ ただ……、あなたを騙していたわたしは、わたしじゃなかった。ジェフを愛したわたしは、わたしじゃなかった。わたしは狂気に捉えられていた。熱に浮かされたように、理性を失っていた。あの気狂いじみた愛はわたしに何の幸せも呉れなかった。呉れたのは恥と、自責の念だけ。

クロスビー みつともないことに俺は……、すべてが判った今でも俺は、おまえを愛している。ああ、神様。おまえは軽蔑するだろうな。俺は自分で自分を軽蔑している。

レズリーはゆっくりと首を振る。

レズリー いいえ。わたしは、そんなあなたの愛に値するようなことを何もしてこなかった。見下げ果てた女。ああ、自分以外の誰かに罪を被せられたら……。でも、できない。わたしが苦しまなくちやならないのは、全部自分のせい。ああ、ロバート、あなた。

クロスビーは顔を背けると、手で顔を覆う。

クロスビー ああ、どうすればいいんだ。俺は、みんな失った。何もかもみんな。

彼は身を屈めて啜り泣く。涙を流すことになれていない男の、見るも痛ましい啜り泣きである。レズリーは彼の横ひざまづに跪く。

レズリー 泣かないで、お願い。あなた。あなた。

クロスビーは急に背筋を伸ばすと、レズリーを横に押しつける。

クロスビー 俺は馬鹿だ。こんなみつともない姿を見せちまって。済まない。

彼は急ぎ足で部屋から出てゆく。レズリーは立ち上がる。

ジョイス 今はそっとしておいた方が良く。気を取り直す時間を与えてやりましょう。

レズリー わたし、心から後悔している。

ジョイス あいつはきつと赦してくれますよ。あなたなしではやってゆけないんだから。

レズリー ああ、もう一度チャンスを与えたら。

ジョイス 本当に、あいつを愛していないんですか。

レズリー ええ。愛せたらどんなにいいことか。

ジョイス じゃあ、何が出来るっていうんです。これからどうするつもりで？

レズリー わたしは、こんなつまらない人間ですが、わたしのすべてをあの人に捧げるつもりです。

あの人だけに。誓ってこの償いはするつもりです。あの人を幸せにできるなら、どんなことでもする。あの人がこのことを忘れられるように精一杯努めます。わたしはあの人を愛していない、

——あの人が望んでいるようには。でも、そのことは決して悟られないようにします。

ジョイス 愛していない男と一緒に暮らしてゆくのは容易なことじゃありませんよ。しかしあなたには悪を行なうだけの勇氣と強さがあつた。ならばその勇氣と強さを持って善を行なうこともできるかもしれない。そしてそれが、あなたへの天罰かもしれない。

レズリー いいえ、違います。それは天罰ではない。そのくらいのことにはわたしにだってできますし、

喜んでします。あの人はとても思いやりのある人ですから。わたしへの天罰は、もつともつと大きい。わたしの天罰は、わたしが今でも、わたしが殺した男を心から愛しているということです。

〔幕〕

戯曲が活字となって出版されるのは、単に作者の虚栄心を満足させるためでなく、演劇に携わる素人の人たちの便をも考えてのことであろう。ならば、この劇が「プレイハウス」で演じられた時の台本をここに載せておくのも悪くならう。二、三回の舞台稽古の後、私は最後のレズリー・クロスビーの告白を「スローバック」に置き換えた。何故かという、一つの芝居の中で長い台詞を二度も聞かされるのは観客にとって退屈だろうと思ったからだ。そうした退屈を避けるべく作者が多少のリスクを冒しても、それは賢明なことではあるまいか、私はそう考えている。

ジョイスは無言でポケットから札入れを取り出し、そこから手紙を取ると、クロスビーに渡す。クロスビーはそれを読む。

クロスビー（嗚れ声で）これは何を意味するんだ。

レズリー ジェフ・ハモンドがわたしの恋人だったということ。

クロスビー（両手で顔を覆って）そんな。そんな。

ジョイス 何故ハモンドを殺したんだね。

レズリー あの人はずっとわたしの恋人だった。

クロスビー（苦悶の表情で）嘘だ。

レズリー 何年間も。でもあの人は変わってしまった。何故なのか分からなかった。彼がもうわたしを愛していないなんて信じられなかった。わたしは彼を愛していた。愛したくはなかったけれど、どうしようもなかった。彼を愛している自分が大っ嫌いだった。でもあの人がわたしの全てだった。わたしの人生だった。そのうちに中国人の女と一緒に暮らしていると噂に聞いた。信じられなかった。信じようとしなかった。でも、その女を見てしまった。この目で。金のブレスレット、金のネックレスを着けて、村を歩いていた。……中国女。ああ、悍ましい。部落の誰もが女は彼の愛人だと知っていた。擦れ違った時、女がわたしを見た。その瞬間わたしには分かった、——わたしも彼の愛人だと、女が知っていることが。わたしはあの人を呼びにやらせた。

舞台が暫し暗くなる。照明がつくと、レズリーが第一幕で着ていたのと同じドレスを身につけ、テーブルに向かってレースを編んでいる。ジェフリー・ハモンドが入ってくる。三十年代後半の色男。快活で自信に溢れている。

レズリー ジェフ。来ないのかと思った。

ハモンド きみのあの野暮な旦那さんはシンガポールへ何しに行ったんだい？
レズリー バーニー・キヤメロンが猟銃を売りがついていると聞いて、それを買いに。
ハモンド 村の連中が話してるあの虎を仕留めようってわけか。僕が先に仕留めちゃいますがね。酒はある？

レズリー 自分でやって。

ハモンドは酒類の置かれたテーブルへ行き、グラスにウイスキーとソーダ水を注ぐ。

ハモンド ねえ、何かあったの？ あの手紙、ちよつと興奮して書いたみたいに見えたけど。

レズリー 手紙は処分した？

ハモンド ああ、すぐ破り捨てたよ、いつもどおりね。僕のこと信用してないの？

レズリー (突然) ジェフ、わたし、もう我慢できない。このまま続けることはできない。

ハモンド 何故？ 何があったの？

レズリー ああ、とほけないで。とほけたって無駄よ。どうして最近逢ってくれないの。それに何の連絡もない。

ハモンド やらなくちゃならないことがいっぱいあってさ。

レズリー でも、手紙を書く時間くらいあるでしょうに。

ハモンド 無用な危険を冒すのは良くないと思ってね。スキヤンダルになりたくないんなら、最低限、

用心は怠らないことさ。これまでのところ僕らにはつきがあった。それを、滅茶苦茶にしたりは
ないだろう？

レズリー あなた、わたしが何も知らないと思うの？ そんな馬鹿だと？

ハモンド ねえ、レズリー、喧嘩するために僕を呼んだんなら、帰るよ。最近はいつも口喧嘩になる。

うんざりしてきたね。

レズリー 喧嘩？ 分かってるでしょ、どんなにあなたを愛してるか。

ハモンド じゃ、きみの愛の表現の仕方って、随分と変わってるわけだ。

レズリー あなたの言うことを聞いているとイライラする。

ハモンドは何かを考えるように暫し彼女を見ている。それから両手をポケットに入れると、
ゆっくりとレズリーに近づく。

ハモンド ねえ、レズリー、最近はお会いせば必ず喧嘩になる、きみだってそう思うだろう？

レズリー わたしの責任だって言うの？

ハモンド そうじゃない。多分僕の責任だろう。でも、僕らみたいな関係にある二人の間にこういう
ことがしょっちゅう起こるってことは、二人を結んでいる糸がちよつと細くなってるように思う
んだ。

レズリー どういうこと？

ハモンド つまり、こんな時は、こう考えるのが常識的なんじゃないかな、——僕らはこれまで楽しい時を過ごしてきた。しかしどんなに良いことにもいつかは終わりが来る。だから今できる最善の策は、ちよつと時間をおいてみることに、僕らが良い友達のまままでいられる間に、ね。

レズリー (怯えたように) ジェフ。

ハモンド 事実を事実として見る方が良いと思う。

レズリー (突然怒りに燃えて) 事実! じゃあ、あの中国女はあなたの家で何してらつていうの。

ハモンド 中国女? 一体何の話をしてるの。

レズリー わたしが知らないと思つて?——あなたがもう何ヶ月も中国女と一緒に暮らしてるのを。

ハモンド くだらない。

レズリー わたしがそんなに馬鹿だと? 村じゃ、すっかりゴシップになつてるわ。

ハモンド (肩を竦めて) ねえ、村の連中のするゴシップを一々聞いてたら……

レズリー (遮つて) じゃあ、あの女はあなたの家で何をしてるの。

ハモンド 中国女がいるなんて知らなかったな。召使が暮らしてる所で何が起こつてるかは気にした

ことがないからね、連中がしつかり仕事をやつてる限り。

レズリー それ、どういう意味?

ハモンド つまり、ボーイの一人が若い娘を連れ込んだからつて、驚かないつてことさ。その娘が僕

の邪魔にならないなら、何を気にする必要がある。

レズリー わたし、その女を見た。

ハモンド どんな女だった?

レズリー 若くもないし、太つてた。

ハモンド お世辞にやなつてないな。しかし、まあ、ボーイ長も若くはないし、太つてるから。

レズリー そのボーイ長は一ヤード五ドルもする絹のドレスを女に買ってやれるの? それに何百ドルもする宝石も身につけてた。

ハモンド その女は金を貯めるのが好きなようだね。貯めた金は宝石に投資するのが一番だつて考え

てるようだ。

レズリー あなたの愛人じゃないつて誓える?

ハモンド 勿論。

レズリー 名誉に懸けて?

ハモンド 名誉に懸けて。

レズリー (荒々しく) ウソよ。

ハモンド 分かつた、分かつた。嘘だよ。でも、そういうことなんだから、どうして僕を自由にして

くれないの。

レズリー どうしてつて……、どんなことがあつても、あなたを愛してるから、心から愛してるから。

あなたと別れるなんてできない。あなたがこの世のすべてのよ。もしわたしを愛していないなら、……たとえ愛していないとしても、お願い、可哀相だと思つて。あなたなしでは、わたし、

どうしたらいいか分からなくなる。ああ、ジェフ、愛してるわ。わたしほどあなたを愛してる女

はいない。確かに時々あなたに酷いこと言ってしまう。でも、わたし、ずっと不幸だったのよ。
ハモンド ねえ、きみを不幸にしたくはない。けど、遠回しに言っても始まらないだろう。もう終わ
ったんだ。だから僕を自由してくれなくちゃ、実際問題。

レズリー いや。いやよ。ジェフ、本気じゃないんしょ？ そんなことできるはずない。

ハモンド ほんとに申し訳なく思うよ。でも、事實は事實なんだ。きみもそれを直視すべきなんだ。
全ては終わった、きみもそこから始めるべきだ。僕は決めた。それしかないんだ。

レズリー ひどい。なんて残酷なの。野良犬にだってそんな酷いことはしないはずよ。

ハモンド きみを愛していないからって、それは僕の責任じゃない。そうだろう。人間、好きか、好
きじゃないかのどつちかなんだ。

レズリー ああ、あなたって、氷のよう。あなたのためならどんなことでもするのに、なのに、そう
させてくれない。

ハモンド なあ、いい加減にしてくれ。どうして理性的になれないんだ。言っただろう、——もう何
もかもうんざりだって。まだ、これ以上言わせたいのか、きみは僕にとつて何の意味もないって。
分からない？ 薄々感じてたんじゃなの？ もしそうじゃなかったら、きみは明き盲だ。

レズリー (必死に) ええ、感じてた。よく分かった。でもそんなこと関係なかった。わたしの
この胸に疼うずっていたのは、もう愛なんでものじゃなかった。狂気だった。あなたに逢うことは拷
問だった。でも、逢えないことは、その何十倍も苦しい拷問だった。もし今わたしを捨てると言
うんなら、自殺する。(彼女はテーブルの上にあつた拳銃を取る。) 本当よ、自殺してやる。

ハモンド (苛いら々して) そんな馬鹿なこと言わないで。

レズリー 本気じゃないって思うの？ 死ぬ勇気がないって？

ハモンド (苛立ちに我を忘れて) もう我慢できない。誰だつてきみといたら気が変になる。僕を愛
していない、うんざりだって言うんなら、どうしてとつとど追い出さないんだ、ホントに。僕が
女つてものが解と解とつてないと思うのか。

レズリー あなたはわたしの人生をメチャメチャにした。なのに、もう飽きたからって、わたしを捨
てようとする、着古したコートみたいに。いや、いやよ。

ハモンド 勝手にしろだ。言いたいだけ言えればいい。でも、もう終わったんだ。

レズリー 絶対あなたを放さない。絶対。絶対。

彼女は腕をハモンドの首に廻そうとする。が、ハモンドはその腕を荒つぱく払いのける。彼
女に触られたことで、一層苛立ちがつのる。

ハモンド うんざりだ。反吐へどが出る。きみの顔なんか見たくもない。

レズリー そんな。ジェフ、そんなこと。

ハモンド (荒々しく) 本当のことが知りたいんなら、言ってやろう。そうだ、あの中国人の女は僕
の愛人だ。誰に知られたって構わないさ。もしきみかあの女かどちらかを選べって言うなら、あ
の女を選ぶさ、いつだってな。だから、頼むから、もう放はなつてくれ。

レズリー この人非人！

彼女は銃を握ると、ハモンドめがけて撃つ。ハモンドはよろめき、崩れかかる。照明が消え、舞台は再び暗くなる。

レズリー わたしは後を追って、もう一発撃った。あの男は倒れた。わたしは真上から、弾がなくなるまで何度も撃った。

照明が戻る。クロスビーとジョイスがレズリーの話を聞いている。レズリーは先程の衣装に戻っている。

クロスビー レズリー、俺はおまえからそんなことをされるようなことを何かしたか？

レズリー いいえ。わたしには何の言訳もできない。わたしはあなたを裏切った。

クロスビー これからどうしたいんだ？

レズリー あなたが決めて。

クロスビー どうしてあんなことを。レズリー、みっともないことに俺は……、すべてが判った今でも俺は、おまえを愛している。ああ、神様。おまえは軽蔑するだろうな。俺は自分で自分を軽蔑している。

レズリーはゆっくりと首を振る。

レズリー いいえ。わたしは、そんなあなたの愛にふさわしいことを何もしてこなかった。ああ、自分以外の誰かに罪を被せられたら……。でも、できない。わたしが苦しまなくちゃならないのは、全部自分のせい。ああ、ロバート、あなた。

クロスビーは顔を背けると、手で顔を覆う。

クロスビー ああ、どうすればいいんだ。俺は、みんな失った。何もかもみんな。

彼は身を屈めて啜り泣く。涙を流すことになれていない男の、見るも痛ましい啜り泣きである。レズリーは彼の横に跪く。

レズリー 泣かないで、お願い。あなた。あなた。

クロスビーは急に背筋を伸ばすと、レズリーを横に押しつける。

クロスビー 俺は馬鹿だ。こんなみつともない姿を見せちまって。済まない。

彼は急ぎ足で部屋から出てゆく。レズリーは立ち上がる。

ジョイス 今はそっとしておいた方が良い。気を取り直す時間を与えてやりましょう。
レズリー わたし、心から後悔している。

ジョイス あいつはきつと赦してくれますよ。あなたなしではやってゆけないんだから。

レズリー ああ、もう一度チャンスを与えたら。

ジョイス 本当に、あいつを愛していないんですか？

レズリー ええ。愛せたらどんなにいいことか。

ジョイス じゃあ、何ができるっていうんです。これからどうするつもりで？

レズリー 誓って、あの人を幸せにするために、どんなことでもする。この償いはするつもりです。

あの人忘れられるように精一杯努めます。わたしはあの人を愛していない、——あの人望んでるようには。でも、そのことは決して悟られないようにします。

ジョイス 愛していない男と一緒に暮らしてゆくのは容易なことじゃありませんよ。しかしあなたには悪を行なうだけの勇氣と強さがあった。ならばその勇氣と強さを持って善を行なうこともできるかもしれない。そしてそれが、あなたへの天罰かもしれない。

レズリー いいえ、違います。それは天罰ではない。そのくらいのことにはわたしにだってできますし、

喜んでします。あの人はとても思いやりのある人ですから。わたしへの天罰は、もつともつと大きい。わたしの天罰は、わたしが今でも、わたしが殺した男を心から愛しているということです。

〔幕〕

モームが自らの戯曲を小説化したものは、私の知る限り、三つである。 *A Man of Honour* (一九〇三) は『回転木馬』(一九〇五)の主要なエピソードとして活かされ、 *Loaves and Fishes* (一九〇三) は *The Bishop's Apron* (一九〇六)となり、『探険家』(一九九九)はそのままの題名で小説化(一九〇八)されている。対して、小説を戯曲化したものも三つ。一つは短編『悪例』(一九九九)を焼き直した『シェビー』(一九三三)。二つ目は、長編 *The Hero* (一九〇一)を換骨奪胎した *The Unknown* (一九二〇)。(この二つは他の四作品と違って、書かれた時期に相当の開きがあつて、共にキリスト教を扱ったものである点が興味深い。)そして三つ目がこの『手紙』(短編小説は一九二四、戯曲は一九二七)である。不幸にして、 *Loaves and Fishes* は未読なので何とも言えないが、小説化された他の二つでは小説の方が断然面白いし、『悪例』と『シェビー』とを比べれば『シェビー』に軍配が上がる。つまり、これら四作品では、後で書かれたものの方が読み応えがある。(*The Hero* と *The Unknown* は、私にはどちらがどうとは言いがたい。)では、『手紙』はどうか。

短編小説『手紙』は、百編以上あるモームの短編小説の中でも傑作の一つだろう。モームは母校キングズ・スクールの校長・F・J・シャリー司教に、「もし作家として私の名声が後世に残るとしたら、それは短編小説の作家としてのものだろう」と語つたというが、この『手紙』は、『雨』や『赤毛』と並んで、後世に残る作品だと思う。

戯曲『手紙』は、モームお気に入りの女優で当時ロンドンのプレイハウス劇場を経営していたグラデイス・クーパー(一八八八―一九七一)に、彼女自らが主役をつとめる演目として、短編小説『手紙』を舞台化するよう頼まれたことで生まれた。そして二月に始まった公演は三百三十八回のロングランを記録することになる。クーパーによると、モームは「一緒に仕事をしやすい人」で、リハーサルには青鉛筆を持って現れ、役者の意見を喜んで受け入れて台詞を削ってくれたそうだ。「君のお蔭で沢山の台詞を削られちまったから、その台詞を集めてもう一つ別の劇を書くことにするよ。」という冗談を飛ばした、とクーパーは語っている。(*Somerset Maugham by Ted Morgan, Jonathan Cape社、London 一九八〇年、二九九頁*)

さて、では戯曲『手紙』は小説『手紙』とどこが異なっているのか。あとがきをさきに読みたがる人達の楽しみを奪つてはいけないので、詳細は控えるが、差し障りない程度に大きな違いを幾つか挙げてみよう。

一つは、犯人を冒頭で示していること。観客の多くは劇を見る前に小説を読んでいるものとモームは考えていたのだろう。既に犯人を知っている以上、観客の求めているものは単なる犯人捜しのスリラーではないはず、そう考えてこの形を取つたものと思われる。

次に、最後に小説とは大きく異なっていること。まず場面だが、小説ではジョイスの家だったが、戯曲ではクロスビーのバンガローである。そして、小説では、それまでハモンドを殺害した状況・心境を夜叉のような表情で語っていたレズリーが、「寝室の準備ができたからちよつとお休みなさいな」というジョイス夫人の言葉に、一瞬にして夜叉の表情から淑女のそれに戻って「いま行きませう」と応え、「劇的な”幕切れを迎える。これはこれで、常に人間の不可解さを描いてきたモームらしい

終り方である。それに対し、戯曲では、レズリーの人間としての暖かさも描かれて、「落ち」の鋭さは幾分失われている。が、この救いのない物語の大詰め、夫を気遣うレズリーの台詞を聞いた観客は、多少なりとも安堵感を憶えながら家路に就いたのではあるまいか。これは、「劇場に足を運ぶ人たちの知的能力はあまり高くなく、感情的で、センチメンタルだ」（『サミング・アップ』三十六章参照）と述べているモームが、観客に迎合したと言えなくはない。しかし、シニカルと言われることの多いモームの中に、こうした暖かさが流れていることもまた確かだ。

三つ目。レズリーの夫ロバートが詳しく描かれていること（特に第三幕）。愛するハモンドに捨てられたレズリーだけでなく、レズリーの愛を得られないロバートにも重要な役割を与えることによつて、戯曲『手紙』は、モーム永遠のテーマ「自分の愛する人から愛されない者の悲劇性」をより一層増したのではあるまいか。

もう一つ。これは短編と戯曲との違いというのではないが、戯曲『手紙』はモームのものとしてはト書きの多さが目につく。小説では地の文となっていたものを無意識のうちにト書きにしてみましたのだろうか。いささか説明過剰に感じられる。

ついでにもう一つ。「付録」についてだが、これはモームのサービス精神の現れだろう。（プライドの高い作家なら、普通、こんなことはする筈がなく、どちらか自分が良しとする方だけを「決定稿」として活字に残したと思う。）二つを比べて見ると、文学作品としては元の戯曲の方が、舞台のための台本よりも優れているように私には思われる。（だからモームは戯曲を本文とし、舞台台本を付録としたはず。）当時のドラマツルギー——所謂「時と所の一致」——を大切にしていたのである

うモームは、台本に用いた“throwback”の技法をあまり良しとしなかったのではあるまいか。ただし、映画化あるいはテレビドラマ化するなら舞台台本の方が映像的效果は高いだろう。

最後に、第二幕の不自然さについて、宮地國敬氏著『モームの芝居』（英宝社一九九一年）から少々長い引用させていただく。（一九五—一九六頁）

「戯曲では、物語を都合よく展開させるために、構成上少々無理をしているところがいくつかが目につく。そしてそのほとんどが第二幕に集中している。そのことは、劇の展開上なくてはならないいくつかの短い場面——本来はそれぞれ独自の入場を必要とし、そこで処理されねばならないもの——を、作者が第二幕のこの入場で集中的に処理したために生じたのである。しかも、そのことのために、この入場の性格が極めて曖昧なものになってしまっている。

つまり第二幕の入場は拘置所の面会者室（the visitors' room）で、もともと面会者待合室であると考えられる場所である。それ故、この部屋で待っていたクロスビーが呼び出されて、レズリーと面会するために、別な場所即ち面会室へ行ったのである。それが途中から、この部屋自体が面会室に変わってしまい、ジョイスの面接に応じるために、レズリーがここへやって来るのである。しかも、レズリーが去ると、この部屋は再び待合室に変わり、クロスビーやオンが入り出すようになる。そしてこのことが、観客の目には非常に不自然に感じられるのである。

ついで、細かいことをいくつか挙げてみよう。

まず、ジョイスがレズリーとの面接に、直接関係のないオンを伴って来ていることである。オンが面接に無関係であることは、彼がその面接に立ち会っていないことから言える。オンはあ

とで話題になる例のハ手紙Vの告知や売買交渉に不可欠の人物であるがために、ジョイスが伴って来たのであるが、もしオンを、レズリーとの面会に出て行くクロスビーと入れ代わりに登場させ、裁判を明日に控えたこの時点で判明したハ手紙Vの存在を、急いでジョイスに連絡するために来たのだとすれば、少なくとも先程指摘した不自然さは解消できたかもしれない。

次に、この面会者室で、ジョイスがクロスビーにオンを紹介していることである。紹介するということは、クロスビーとオンとが初対面であることを意味する。しかしそんなことはあり得ない。ジョイスとクロスビーとは長年の友人で、事件当夜、クロスビーはジョイスの家に泊まっていたほど親しい間柄であるし、事件後の六週間の間に、クロスビーがジョイスの事務所をしばしば訪れていたと考えてもおかしくはない。そうだとすれば、ジョイスの事務所で弁護士見習中の有能な若者オンとクロスビーがまったく出会わなかったとは考えられないことである。これも、作者が、この場面でオンをハ観客にV紹介するのに、適当な方法を考え出せなかったため、クロスビーに紹介するという極めてお座なりな手段を用いたからである。」

廻り舞台、紗幕などの舞台装置が一九二〇年代と比べ大きく発達した現在、『手紙』を上演しようとする演出家は大いに参考にすべき意見だと思うが、如何だろう。

翻訳に当たっては、例によって石川芳恵先生のお世話になった。また、田中西二郎氏訳の短編『手紙』（新潮社）も大いに参考にさせていただいた。この場を借りてお礼申し上げたい。

二〇一六年秋